

『完成せるヨーガの環』(*Nispannayogāvalī*)

第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト

森 雅 秀

国立民族学博物館研究報告別冊 7号

1989年

『完成せるヨーガの環』(*Nispannayogāvalī*)

第21章「法界語自在マンダラ」訳およびテキスト

森 雅秀

インド仏教の伝統を受け継いだネパールとチベットにおいて広く流行した法界語自在マンダラ（以下、法界マンダラと略す）は、二百余りの神がみによって構成されるきわめて規模の大きなマンダラである。法界マンダラには、仏、菩薩、女尊、護方神、雜神、群小神といった仏教パンテオンのあらゆるヒエラルキーに属する神がみが登場し、ヨーガ・タントラのマンダラの集大成であるとされる¹⁾。マンダラの全体は第一重から第四重までの四つの部分からなり、「法界の言葉に自在なるもの」という別名を持つ文殊を中心とした同心円的な構造を持つ。内マンダラと呼ばれる第一重には、ヨーガ・タントラの代表的なマンダラである金剛界マンダラの神がみがおもに配され、第二重には大乗仏教の重要な教理や概念が尊格化された女尊が並ぶ。第三重には、伝統的な菩薩が四方を囲むが、その多くも金剛界マンダラの中に見いだせる。さらに第三重には四門と四維、そして上下の十方にマンダラを護衛する護方神が位置している。最外周の第四重は金剛族マンダラと呼ばれ、ヒンドゥー教の神がみ、龍王、阿修羅、夜叉、星宿神などの、仏教パンテオンの中で下層に位置づけられる神がみが、文殊への帰依者として置かれている。

法界マンダラは、文殊を賞賛する内容を持つ經典『文殊室利真実名經』*Mañjuśrī-nāmasamgīti* の第四章にもとづくマンダラであるといわれる²⁾。しかし、この章はわずかに三偈で終わっており、具体的なマンダラへの言及は含まれていない。そのため、マンダラを構成する個々の神がみの名や位置、図像学的な特徴などは注釈者たちの手にゆだねなければならなかった。このうち、インド、及びチベット、ネパール

1) 仏教パンテオンのヒエラルキーについては[立川 1987b: 344–347]参照。法界マンダラについては[MALLMANN 1964: 101–183] (NPY の仏訳を含む) [清水 1983] (NPY の和訳を含む) [立川 1987a: 164–170] [田中 1987: 177–180] 参照。[MALLMANN 1964] は、特に各尊の図像学的特徴に詳しい。法界マンダラの作例は[RAGHU VIRA and LOKESH CHANDRA 1967a: No. 21; 1967b: No. 40] [加藤・松長 1981: 45–47] [BODH NAMS RGYA MTHSO 1983: No. 41] [加藤・小林 1985: 21, 37–45, 47] 参照。

2) [WAYMAN 1985: 27–28]

の法界マンダラの規範となつた文献は、マンジュシュリーキールティ *Mañjuśrīkirti* の『虚空のごとく無垢にして清浄なる法界の智の源』*Gaganāmalasupariśuddhadharma-dhātujiñānagarbha* (GGN) である。残念ながらこの文献のサンスクリット原典は発見されていないが、チベット訳がチベット大藏経に収められている。この GGN にもとづいて法界マンダラの観想法を著したのが、著名な仏教学者アバヤーカラグプタ *Abhayākaragupta* (11–12世紀) である。アバヤーカラグプタの代表的な著作のひとつ『完成せるヨーガの環』*Nispannayogāvalī* (NPY) は26種類のマンダラの観想法を解説した文献であるが、その第21章「法界語自在マンダラ」は、中尊の文殊から始まり、最外周に至るまでの神がみの図像学的な特徴をひとつひとつあげている。以下に行ったのは、この章の全訳である。NPY と GGN を比較してみると、全体的にはほぼ一致しているが、身色や持物をはじめ尊名、位置、全体の尊格数に若干の相違があることが知られる。また、NPY と関係の深い文献に『金剛阿闍梨所作集』*Vajra-ācāryakriyāsamuccaya* (ACR) があるが、ここに含まれる法界マンダラの解説は NPY のそれとほとんど同一の内容を持ち、いずれかが他方の典拠になったと考えられる。なお、アバヤーカラグプタには NPY の他に僧院内の儀式を解説した『ヴァジュラーヴァリー』*Vajrāvalī* (VA) が代表作として知られているが、ACR は VA とも密接な関係がある。

仏教はアバヤーカラグプタの活躍した時代のおよそ一世紀後にインドから姿を消すが、その伝統はおもにチベットで継承された。法界マンダラに関しては、パンチェンラマ一世 *Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan* (16–17世紀) が NPY の26種類のマンダラを45種類に増補し、その観想法を著したが、法界マンダラもその中に含まれている。また、17世紀にはチャンキャ・ガワン・ロサン・チューデン *Lchang skyā ngag dbang blo bzang chos ldan* が NPY と VA の注釈書を著し、法界マンダラにも多くの紙幅をさいている。これらを見ると、NPY の伝承がチベットにおいてよく保たれていたことが知られる。一方、チベット仏教の最大の学者のひとりであるプトン・リンチェントップ *Bu ston rin chen grub* (13–14世紀) は、直接 GGN にもとづいて、『法界語自在マンダラに関する儀軌<賢者の宴>』*Chos kyi dbyings gsung gi dbang phyug gyi cho ga, Mkhas pa'i dga' ston* を著した。これは後に、ジャムヤン・ロテル・ワンポ *'Jam dbyang blo grer dbang po* (1847–1914) らによって集大成されたマンダラ理論書『タントラ部集成』*rGyud sde kun btus* においても援用されている。このように、法界マンダラの伝承はいずれも GGN を始まりとするが、チベットでは、GGN に直接もとづくものと、すでにインドで GGN を参照して著

された NPY にもとづくものの二派があったことが知られる。

NPY のサンスクリット校訂本は1949年に Benoytosh Bhattacharyya によって発表された。同書は三種類の写本にもとづいて校訂され、詳細な解説と尊名の索引を含み、長い間、仏教图像学の基本的な文献資料としての位置を占めていた。しかし、使用されている写本の不備、当時の時代的な制約などのため、昨今の研究水準からみて文献学的にも图像学的にも満足できるものではなかった。今回、新たに四種類のサンスクリット写本をもとにチベット訳テキストを参照しつつ校訂を進め和訳を行った。各テキスト、及び校訂、和訳に際して使用した参考文献は以下の略号に列挙した。またそれらの該当箇所は凡例に記した。

略号

ACR: *Vajrācāryakriyāsamuccaya*.

AS₁: *Jagaddarpaṇa, Vajrācāryakriyāsamuccaya* [LOKESH CHANDRA 1977a].

AS₂: —, — (東京大学図書館所蔵サンスクリット写本 [MATSUMAMI 1965: No. 111]).

AT₁: *Avadhūtipa dpal ldan 'gro ba'i me long* (Avadhūta Srimaj Jagaddarpaṇa), *Rdo rje slob dpon gyi bya ba kun las btus pa* (*Vajrācāryakriyāsamuccaya*), TTP, Vol. 86, No. 5012, 222, 5, 7-322, 1, 5.

GDK: [JAM DBYANG BLO GTER DBANG PO 1971].

GGN: 'Jam dbyang grags pa (Mañjuśrikirti), *Nam mkha' dri ma med pa shin tu yougs su dag pa chos kyi dbyings kyi ye shes kyi snying po* (*Gaganāmalasupariśuddhadharmadhātuñānagarbha*), TTP, Vol. 75, No. 3416, 192, 1, 4-222, 4, 7.

NG: *Abhayākaragupta, Niṣpannayogāvalī* [BHATTACHARYYA 1972].

NPY: *Niṣpannayogāvalī*.

NS₁: *Abhayākaragupta, Niṣpannayogāvalī* (東京大学図書館所蔵サンスクリット写本 [MATSUMAMI 1965: No. 215]).

NS₂: —, — (同上 [MATSUMAMI 1965: No. 216]).

NS₃: —, — (同上 [MATSUMAMI 1965: No. 217]).

NS₄: —, — (個人蔵サンスクリット写本).

NT₁: 'Jigs med 'byung gnas sbas pa (Abhayākaragupta), *Rdzogs pa'i rnal 'byor gyi phreng ba* (*Niṣpannayogāvalī*), TTP, Vol. 80, No. 3962, 126, 3, 4-154, 2, 8.

NT₂: —, — (デルゲ版チベット大藏經 No. 3141, 1167, 5-1280, 7.)

NT₃: —, — (東洋文庫所蔵ナルタン版チベット大藏經 No. 1957, thu109a, 6-175a, 2).

NT₄: —, *Dpal 'jam pa'i rdo rje mnong par rtogs pa kun las btus pa rdzogs pa'i rnal 'byor gyi phreng ba* (*Srīmañjuvajrādikramābhisaṃayasamuccayaniṣpannayogāvalī*), TTP, Vol. 87, No. 5023, 47, 5, 6-77, 4, 5.

Skt.: Sanskrit.

Tib.: Tibetan.

TTP: *Tibetan Tripitaka, the Peking Edition*, Suzuki Foundation, (『影印北京版西藏大藏經』 鈴木 學術財團).

VA: *Vajrāvalī*.

- VS₁: Abhayākaragupta, *Vajrāvalī* [LOKESH CHANDRA 1977b]).
- VS₂: —, — (東京大学図書館所蔵サンスクリット写本 [MATSUMAMI 1965: No. 350]).
- VS₃: —, — (同上 [MATSUMAMI 1965: No. 351]).
- VT₁: 'Jigs med 'byung gnas sbas pa (Abhayākaragupta), *Dkyil 'khor gyi cho ga rdo rje phreng ba (Vajrāvalī nāma maṇḍlopāyikā)*, TTP, Vol. 80, No. 3961. 79, 1, 1-126, 3, 4.
- VT₂: —, — (デルゲ版チベット大藏經 No. 3140, 981, 1-1167, 3).
- VT₃: —, — (東洋文庫所蔵ナルタン版チベット大藏經 No. 1956 thula, 1-109a, 6).
清水: [清水 1983]
チャンキヤ: [NGAG DBANG BLO BZANG CHOS LDAN 1957a]
パンチェン: [PAN CHEN BLO BZANG CHOS KYI RGYAL MTSCHAN 1973]
ブトン: [LOKESH CHANDRA 1969]
- * NS は NPY のすべてのサンスクリット・テキスト (NG を除く) を、NT は NPY のすべてのチベット訳テキストを表す。また NS_{1,3} は NS₁, NS₃ を、NS₁₋₃ は NS₁, NS₂, NS₃ を表す。
他もこれに従う。
- * NS₁55a, 1 は NS₁ の第55葉表面 1 行目を表す。NT₁141, 3, 8 は NT₁ (TTP, Vol. 80) の141頁第3葉 8 行目を表す。
- * デルゲ版チベット大藏經は次のテキストを使用した。
The Nyingma Edition of the sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gyur sponsored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center Vol. 61. Oakland: Dharma Publishing.

凡 例

- [1] 和訳は NG [BHATTACHARYYA 1972: 54-65] をサンスクリット・テキストの底本とし、NS₁55a, 1-66b, 4; NS₂78b, 1-96b, 1; NS₃66b, 2-82a, 2; NS₄62a, 5-77b, 5 を参照して行った。
- [2] チベット訳テキストは NT₁141, 3, 8-145, 2, 2; NT₂1228, 5-1244, 1; NT₃thu144b, 1-153a, 5, および NT₄64, 2, 7-68, 1, 8 を参照した。このうちはじめの三本は同一の訳者によるものである。NT₄ は北京版にのみ含まれる訳本で、訳出時期は他の三本に先行する。サンスクリット・テキストははじめの三本によく対応する。
- [3] ACR の一部は NPY 全体とほとんど一致する。第21章に関しては AS₁232, 1-248, 2; AS₂140b, 7-150a, 3 がその該当箇所であり、和訳に際しては NPY のサンスクリット・テキストに準ずる扱いをした。ACR のチベット訳テキストは北京版のみ参照した (AT₁272, 4, 4-275, 4, 8).
- [4] NPY に対する注釈書としてパンチェン一世 94, 5-111, 3; チャンキヤ 12, 4, 6-18, 5, 1 を参照した。また、GGN192, 4, 3-196, 5, 1; ブトン 338, 4-359, 7; GDK457, 2-481, 6 も参照した。NPY とこれらのテキストの間の異同は註に示した。ただし、ブトンと GDK に関しては、GGN に一致する場合註記は省略した。
- [5] 第三重までの和訳 [清水 1983: 100-123] と、仏訳 [MALLMANN 1964: 82-97] もあわせて参照した。
- [6] 内容の理解をはかるために () 内に説明の語句、原語などを入れた。ただし、固有名詞の原語には () を省略し、一字目を大文字にした。また、内容に応じて段落を分け、見出しをつけた。翻訳上補った語句は [] 内に入れた。
- [7] 尊名のあとの番号は諸尊リストの番号に対応する。

訳

0. 場 の 設 定¹⁾

法界語自在マンダラについて述べる。前章の文殊金剛マンダラのように金剛籠などの観想を行い²⁾、ヤマーンタカ Yamāntaka を始めとする十忿怒尊³⁾を観想する。ただし、この場合、後述する姿を観想する⁴⁾。このマンダラには仏塔は存在しない⁵⁾。

1. 第 一 重

1.1 中 尊

楼閣の中心には二重蓮華⁶⁾ (viśvapadma) の花弁に獅子が乗り、その上の二重蓮華と月輪の上にマンジュゴーシャ (1) がいる。金剛結跏趺坐⁷⁾ (vajraparyanka) をくみ、朝日のように輝く。身色は黃金色⁸⁾、サファイアを頂につけた美しい髪を結い、金剛杵、宝、蓮華、二重重金剛 (viśvavajra) の髪冠⁹⁾の上に五仏の宝冠をいただく。さまざまな宝石、装身具、衣装を身に付け、恋愛のラサ¹⁰⁾ (rasa) にあふれる¹¹⁾。中央、右、後ろ、左の面は順に黄色、青、赤、白である。八臂をそなえ、二臂で転法輪印を示し、右手には剣、矢、金剛杵を、左手には般若経の經函、弓、金剛鈴を持つ¹²⁾。

1.2 八 仏 頂

八葉蓮弁にすわる獅子の上の二重蓮華と月輪には、東方を始めとする四方に大仏頂 (2)、白傘蓋仏頂 (3)、光聚仏頂¹³⁾ (4)、最勝仏頂 (5) が、また北東を始めとする四維には捨除仏頂¹⁴⁾ (6)、高仏頂 (7)、高大仏頂 (8)、勝仏頂¹⁵⁾ (9) がいる。これらの八仏頂は金剛結跏趺坐をくみ、宝冠を付ける。身色は黄色、二臂で、右手は輪を持ち上げ¹⁶⁾、左手で各自の座を抑える¹⁷⁾。

1.3 四仏と十六菩薩

1.3.1 東 院

次に、東院の中央には象王に乗る阿閦 (10) がいる。身色は青、四面をそなえる。中央の面は青く、忿怒を伴った恋愛ラサを有する。右面は白光色で口を開いた憤激ラサ、後ろの面は黄色で勇猛ラサをそれぞれそなえ、左面は赤で牙をむき下唇を抑える¹⁸⁾。八臂で、右手には剣、金剛杵、矢、鉤を持ち、左手は第一臂でタルジャニー¹⁹⁾ (tarjani)

を示し、残りの手には金剛鉢、弓、羈索を持つ。金剛薩埵(11)、金剛王(12)、金剛愛(13)、金剛喜(14)によって囲まれる。

1.3.2 南院

南院の中央には馬王²⁰⁾に乗る宝生(15)がいる。身色は黄色、[中央、右、後ろ、左の順に] 黄色、黒²¹⁾、白、赤の四面を有する。八臂で右手には金剛杵、剣、矢、鉤を²²⁾、左手には如意宝幢(如意宝珠の付いた幢)、金剛鉢、羈索、弓²³⁾を持ち、金剛宝(16)、金剛光(17)、金剛幢(18)、金剛笑(19)によって囲まれる。

1.3.3 西院

西院の中央に孔雀に乗る阿弥陀(20)がいる。身色は赤で²⁴⁾、赤、黒、白、黄色の四面を持ち、八臂である。右手には金剛杵、矢、剣、鉤を、左手には蓮華、弓、羈索、鉢を持つ。金剛法(21)、金剛利(22)、金剛因(23)、金剛語²⁵⁾(24)によって囲まれる。

1.3.4 北院

北院の中央にはガルダ鳥²⁶⁾に乗る不空成就(25)がいる。身色は緑で四面を有する。中央の面は緑で牙をむき、右の面は黄色²⁷⁾で寂靜のラサ²⁸⁾を、後ろの面は赤で恋情のラサを、左の面は白で寂靜のラサをそなえる。八臂を有し、右手には剣、金剛杵、矢、鉤を持ち、左手は第一臂でタルジャニーを示し、残りの手には鉢、弓²⁹⁾、羈索を持つ。金剛業(26)、金剛護(27)、金剛牙(28)、金剛拳(29)によって囲まれる。

1.3.5 まとめ

阿閦をはじめとする四如来は、各自の乗り物³⁰⁾の上にある二重蓮華³¹⁾と日輪の上に金剛結跏趺坐で座り、さまざまな宝石、装身具、衣装を身につけ、宝冠³²⁾をいただく³³⁾。一方、金剛薩埵等の十六菩薩は【各院の】北東をはじめとする四維にある³⁴⁾二重蓮華と月輪の上に、金剛界マンダラ³⁵⁾で説いた姿で住する³⁶⁾。これに関しては【各院の】四方に住するという説もある³⁷⁾。

1.4 四 姉

北東をはじめとする四維の³⁸⁾二重蓮華と月輪の上に、薩埵跏趺坐³⁹⁾ (sattvapary-anika) を組むローチャナー(30)、マーマキー(31)、パーンダラー(32)、ターラー⁴⁰⁾(33)がいる。彼女らは順にマンジュゴーシャ、阿閦、阿弥陀、不空成就と⁴¹⁾同じような特徴を持つ。

1.5 四 摂 菩 薩

東門には金剛鉢(34)がいる。身色は褐色⁴²⁾、金剛の鉢と羈索を持ち⁴³⁾展右⁴⁴⁾

法界語自在マンダラの神々

(āliqha) で立つ。

南門には金剛索(35)がいる。身色は黄色、金剛の縄索を持ち⁴⁵⁾展左⁴⁶⁾ (pratyāliqha) で立つ。

西門には金剛鎌(36)がいる。身色は赤、金剛の鎖⁴⁷⁾を持ち、二臂でヴァイシャーカ歩⁴⁸⁾ (vaiśākapada) で立つ。

北門には金剛鈴(37)がいる。身色は緑、金剛縛で金剛鈴⁴⁹⁾を握り、マンダラ歩⁵⁰⁾ (maṇḍalapada) で立つ。

これらの四尊⁵¹⁾は二重蓮華と日輪の上に立ち、二臂、三眼、一面⁵²⁾をそなえ、逆立つ褐色の髪と髭をはやし⁵³⁾、八匹の龍⁵⁴⁾によって飾られる⁵⁵⁾。

2. 第二重

2.1 十二地

次に、内マンダラ（第一重）の外の第二重のマンダラ⁵⁶⁾には、東方に北東から右廻りに順に十二地⁵⁷⁾がいる。いずれも二臂で⁵⁸⁾、右手に金剛杵、左手には各自の持物を持つ。

このうち、はじめは信解行地(38)がいる。身色は蓮華のような赤色、赤蓮華⁵⁹⁾を持つ。

歓喜地(39)。身色は赤⁶⁰⁾、如意宝⁶¹⁾を持つ。

離垢地(40)。身色は白⁶²⁾、白蓮を持つ。

発光地(41)。身色は赤⁶³⁾、日輪⁶⁴⁾をのせた二重蓮華を持つ⁶⁵⁾。

焰慧地(42)。身色は緑宝 (marakata; エメラルド) のような色⁶⁶⁾、青い睡蓮を持つ。

難勝地(43)。身色は黄色、手を上向きにひざに置き⁶⁷⁾、緑宝を持つ。

現前地(44)。身色は金色、般若經の経函をのせた蓮華を持つ⁶⁸⁾。

遠行地(45)。身色は紺色、二重金剛をのせた二重蓮華⁶⁹⁾を持つ。

不動地(46)。仲秋の月の輝きを有し⁷⁰⁾、月の上に赤い五鉢杵⁷¹⁾をのせた蓮華⁷²⁾の茎を誇らしげに⁷³⁾持つ。

善慧地(47)。身色は白⁷⁴⁾、剣をのせた睡蓮を持つ。

法雲地(48)。身色は黄色、法雲で覆われた般若經の経函を持つ。

善光地⁷⁵⁾(49)。身色は真昼の太陽のような色⁷⁶⁾、正等覺を示す無量光⁷⁷⁾の仏像⁷⁸⁾をのせた蓮華を持つ⁷⁹⁾。

2.2 十二波羅蜜

南には⁸⁰⁾ 十二波羅蜜がいる。いずれも二臂で、右手には如意宝⁸¹⁾、左手には各自の持物を持つ。ただし般若波羅蜜はさらに二臂を持つ⁸²⁾。

このうち、はじめは宝蓮華波羅蜜(50)がいる。身色は赤、月輪をのせた蓮華を持つ。布施波羅蜜(51)。身色は白みをおびた赤、さまざまな穀物の穂⁸³⁾を持つ。

持戒波羅蜜(52)。身色は白、つぼみの付いたアショーカ（無憂）樹の花の房⁸⁴⁾を手にする。

忍辱波羅蜜(53)。身色は黄色、白い蓮華を持つ。

精進波羅蜜(54)。身色は緑宝色、青い睡蓮⁸⁵⁾を持つ。

禪定波羅蜜(55)。身色は紺色、白い蓮華を手にする。

般若波羅蜜(56)。身色は美しく輝く黃金色⁸⁶⁾。般若經の經函を上にのせた蓮華を持つ。さらに二臂で転宝輪印を結ぶ⁸⁷⁾。

方便波羅蜜(57)。身色はプリヤング⁸⁸⁾のような緑色、金剛杵⁸⁹⁾を上にのせた黄色い蓮華⁹⁰⁾を持つ。

願波羅蜜(58)。身色は青い睡蓮のような色⁹¹⁾、剣を上にのせた青い睡蓮を持つ。

力波羅蜜(59)。身色は赤、般若經の經函を持つ。

智波羅蜜(60)。身色は白、さまざまな果実⁹²⁾で飾られた菩提樹の枝を持つ。

金剛業波羅蜜⁹³⁾(61)。身色はさまざまな色、二重金剛杵を上にのせた青い睡蓮を持つ。

2.3 十二自在

西方には⁹⁴⁾ 十二自在⁹⁵⁾がいる。いずれも二臂で、右手には蓮華⁹⁶⁾、左手には誇らしげに各自の持物を持つ。

命自在(62)がいる。身色は白みをおびた赤⁹⁷⁾、ルビー (padmarāga) の上に坐し禪定印を結ぶ無量寿⁹⁸⁾の仏像を持つ。

心自在(63)。身色は白、赤い五鈷金剛杵を持つ⁹⁹⁾。

財自在(64)。身色は黄色、如意宝幢を持つ。

業自在(65)。身色は緑、二重金剛杵を持つ。

生自在(66)。身色はさまざまな色¹⁰⁰⁾、さまざまな色のジャーティの枝¹⁰¹⁾を手にする。

神通自在(67)。身色は空のような紺色¹⁰²⁾、日輪と月輪を上にのせた蓮華を持つ¹⁰³⁾。

勝解自在(68)。身色は蓮の根¹⁰⁴⁾のような白、プリヤングの華鬘¹⁰⁵⁾を持つ。

願自在(69)。身色は黄色、青い睡蓮を手にする。

智自在(70)。身色は青、剣をのせた青い睡蓮を持つ。

法自在(71)。身色は白みをおびた赤¹⁰⁶⁾、吉祥の瓶¹⁰⁷⁾を上にのせた蓮華を持つ¹⁰⁸⁾。

如是女¹⁰⁹⁾(72)。身色は白、右手には白い蓮華、左手には金剛と宝の輪¹¹⁰⁾を持つ。

仏菩提女(73)。身色は金の溶液のような色、右手には五鈷金剛杵を上にのせた黄色い蓮華、左手には輪をのせた如意宝幢を持つ。

2.4 十二陀羅尼

北には十二陀羅尼がいる。いずれも二臂で、右手には二重金剛杵、左手には誇らしげに¹¹¹⁾各自の持物を持つ。

このうちはじめはヴァスマティー¹¹²⁾(74)がいる。身色は黄色、穀物の穂を持つ。

ラトノールカー(75)。身色は赤、如意宝幢を持つ。

ウシュニーシャヴィジャヤー(76)。身色は白、月長石の瓶を手にする。

マーリーチー(77)。身色は赤みをおびた白、糸のついた針¹¹³⁾を持つ。

パルナシャバリー(78)。身色は緑色、孔雀の羽根¹¹⁴⁾を持つ。

ジャーングリー(79)。身色は白、毒の花房を持つ。

アナンタムカー(80)。身色はプリヤングのような緑¹¹⁵⁾、不壊の大宝庫である瓶を上にのせた赤い蓮華を手にする¹¹⁶⁾。

チュンダー(81)。身色は白、数珠を懸けた水瓶¹¹⁷⁾ (kamandalu) を持つ。

プラジュニヤーヴァルダニー(82)。身色は白、剣を上にのせた青い睡蓮¹¹⁸⁾を持つ。

サルヴァカルマーヴァラナヴィショーダニー(83)。身色は緑、三鈷金剛杵を付けた白みをおびた赤い蓮華¹¹⁹⁾を持つ。

アクシャヤジャニーナカランダー(84)。身色は赤、宝の箱を持つ。

サルヴァブッダダルマコーワシヴァティー(85)。身色は黄色、蓮華の上にさまざまな宝の小箱¹²⁰⁾を持つ。

2.5 四 無 碍

東門には法無礙(86)がいる。身色は白みをおびた赤、両手で金剛の鉤と羈索¹²¹⁾をもつ。

南門には義無碍(87)がいる。身色は緑宝色¹²²⁾、左右の手で宝の羈索¹²³⁾を持つ。

西門には詞無礙(88)がいる。身色は赤¹²⁴⁾、両手で両端に蓮華の付いた鎖¹²⁵⁾を持つ。

北門には弁無碍(89)がいる。身色は緑宝色のような緑、三鈷金剛杵を付けた金剛鉤

を両手に持つ。

2.6 四 供 養 女

南東には喜女¹²⁶⁾(90)がいる。身色は黄色、両手で誇らしげに二つの金剛杵を持つ。

南西には鬟女(91)がいる。身色は橙色¹²⁷⁾、両手で宝の環を持つ。

北西には歌女(92)がいる。身色は赤、両手でヴィーナー(琵琶)を演奏する¹²⁸⁾。

北東には舞女¹²⁹⁾(93)がいる。身色は緑、三鈷金剛杵と金剛鈴¹³⁰⁾を両手に持って舞う¹³¹⁾。

2.7 ま と め

これら信解行地を始めとする女尊たちすべては、種々の宝石で輝く衣装を着け宝冠をいただく¹³²⁾。顔には笑みをたたえ、恋愛のラサにあふれ、二重蓮華と月輪の上に薩埵跏趺坐で座る。ただし門衛は日輪の上にいる。あるいは¹³³⁾、これらの門衛も月輪にいるという説もある¹³⁴⁾。

3. 第 三 重

3.1 十 六 菩 薩

第三重¹³⁵⁾には北東から順に¹³⁶⁾菩薩たちがいる。

3.1.1 東

このうち、東の帯には普賢(94)がいる。身色は黄色、右手で与願印(varadamudrā)を示し、左手には剣をのせた青い睡蓮を持つ。

無尽慧(95)。身色は黄色、右手は剣を持ち、左手は施無畏印(abhayamudrā)を示しながら¹³⁷⁾蓮華を持つ¹³⁸⁾。

地藏(96)。身色は黄色、右手で触地印(bhūsparśamudrā)を示し、左手に如意樹をのせた蓮華を持つ。

虚空蔵(97)。身色は緑色、右手であらゆる宝¹³⁹⁾を降らせながら¹⁴⁰⁾、左手に如意宝¹⁴¹⁾を持つ。

3.1.2 南

南には虚空庫(98)がいる。身色は黄色、右手には如意宝を、左手には吉祥の瓶を下げた如意樹¹⁴²⁾を持つ。

宝手(99)。身色は緑色、右手は宝を¹⁴³⁾左手は月輪をのせた蓮華を持つ。

海慧¹⁴⁴⁾(100)。身色は白、右手はほら貝を左手は金剛の剣を持つ¹⁴⁵⁾。

金剛藏(101)。身色は青い睡蓮の花弁の色¹⁴⁶⁾、右手は金剛杵を左手は十地經の経函を持つ。

3.1.3 西

西には観自在(102)がいる。身色は白¹⁴⁷⁾、右手では与願印を示し、左手には蓮華¹⁴⁸⁾を持つ。

勢至(103)。身色は黄色、右手には剣を、左手には蓮華を持つ。

月光(104)。身色は白、右手には金剛の輪を、左手には月輪をのせた蓮華¹⁴⁹⁾を持つ。

網明(105)。身色は白赤色、右手には剣を、左手には日輪をのせた蓮華¹⁵⁰⁾を持つ。

3.1.4 北

北には無量光(106)がいる。身色は白、右手には二重蓮華¹⁵¹⁾を、左手には水瓶をのせた蓮華を持つ。

弁積(107)。身色は黄色、右手で指をはじき¹⁵²⁾、左手は剣をのせた蓮華を持つ。

除憂闇(108)。身色はサフランのような色、右手には五鈷金剛杵¹⁵³⁾を、左手には短槍を持つ。

除蓋障(109)。身色は青色、右手には剣を、左手には二重金剛を特徴とする旗¹⁵⁴⁾を持つ。

3.1.5 まとめ

これらの十六尊は二重蓮華と月輪の上に薩埵跏趺坐で座る。宝冠をいただき¹⁵⁵⁾、さまざまな宝石と衣装で飾られる¹⁵⁶⁾。一面二臂である。

3.2 忿怒尊

3.2.1 四方¹⁵⁷⁾

東門には水牛の上にヤマーンタカ(110)がいる。身色は黒、鼓腹である。六面、六足¹⁵⁸⁾、六臂をそなえる。右手には鉤、剣、矢を持ち、左手は第一臂で羈索を持ちながらタルジャニーを示し、残りの手には鈴、弓¹⁵⁹⁾を持つ。面、足の特徴は前章と同様である¹⁶⁰⁾。

南門には¹⁶¹⁾ プラジュニャーンタカ(111)がいる。身色は黄色、黄色い四面を持つ。中央の面は恋情のラサ、右の面は大口のラサ¹⁶²⁾、後の面は激しい暴虐のラサ¹⁶³⁾、左面は寂靜のラサをそなえる。あるいは、これらの色は順に黄、青、赤、緑である¹⁶⁴⁾。八臂を持ち、右手には羈索、金剛杵、剣、矢を、左手には自分の胸に当てた鉤¹⁶⁵⁾、

金剛鈴¹⁶⁶⁾、短槍、弓を持つ。

西門にはパドマーンタカ(112)がいる。身色は赤¹⁶⁷⁾、赤い四面を持つ。中央、右、後ろ、左の各面は、順に恋情、暴虐、滑稽、寂靜の各ラサをそなえる。あるいはこれらの面の色は順に赤、黒、黄色、白である。八臂をそなえ、そのうちの左右の二臂で金剛の鎖を持ち、残りの右手には金剛杵、剣、矢を持ち、左手は第一臂に鈴を持ち、第二臂は羈索を持ちながらタルジャニーを示し、第三臂には弓を持つ¹⁶⁸⁾。

以上の三尊は遊戯の姿勢で立つ。

北門にはヴィグナーンタカ(113)がいる。身色は青、青い四面を持つ¹⁶⁹⁾。あるいはこれらの面の色は順に青、黄色、赤、緑である。八臂を持ち、そのうちの左右の二臂は金剛縛¹⁷⁰⁾で金剛鈴¹⁷¹⁾を持つ。残りの右手には剣、矢、鉤を、左手は第一臂で羈索を持ちながらタルジャニーを示し、第三、第四臂には弓、鈴を持つ。ヴィナーヤカ *Vināyaka* を展左で踏みつけて立つ。

3.2.2 四 維¹⁷²⁾

北東にはトライローキヤヴィジャヤ(114)がいる。身色は青、青い四面を有する¹⁷³⁾。中央の面は忿怒を伴った恋情、右は暴虐、後ろは勇猛、左は嫌惡の各ラサをそなえる。これらの面の色は、青、黄色、赤、白である¹⁷⁴⁾。八臂を有し、そのうちの二臂で金剛杵と鈴を持ち胸の前でヴァジュラフーンカーラ印¹⁷⁵⁾ (*vajrahūmkāramudrā*) を結ぶ。残りの右手には剣、鉤、矢を、左手には金剛杵¹⁷⁶⁾、羈索、弓を持つ¹⁷⁷⁾。展左の姿勢で立ち、左足でマヘーシュヴァラ *Maheśvara* の頬¹⁷⁸⁾を、右足でウマー *Umā* の胸を踏みつける。

南東にはヴァジュラジュヴァーラーナラールカ(115)がいる。身色は黒¹⁷⁹⁾、恋情、勇猛、嫌惡、慈悲¹⁸⁰⁾の各ラサをそなえた四面を有する。あるいはまた、これらの面の色は、青、白、黄色、赤である。八臂で、右手には金剛杵、剣、矢、円盤を持ち、左手には鈴、羈索、弓、旗¹⁸¹⁾のついたカトヴァーンガ¹⁸²⁾を持つ。妻を伴ったヴィシュヌ *Viṣṇu* を展右¹⁸³⁾で踏みつけて立つ¹⁸⁴⁾。

南西にはヘルカヴァジュラ(116)がいる。身色は青で¹⁸⁵⁾、青い四面を有する。中央の面は暴虐、右は困惑、後ろは大食¹⁸⁶⁾、左は恋情をともなった各ラサをそなえる。あるいはまたこれらの面の色は青、赤、緑、白である。八臂で、右手には五鉛金剛杵¹⁸⁷⁾、矢、血の溢れたカバーラ¹⁸⁸⁾を、左手は一臂で開いた蓮華を胸に当て、残りの二臂で弓、鈴と旗のついたカトヴァーンガを持ち、左右の二臂でマハーバイラヴァ *Mahābhairava* (シヴァ) の生皮を外衣¹⁸⁹⁾のように持つ¹⁹⁰⁾。妻を伴ったプラフマン *Brahman* を展左で踏みつけて立つ。

法界語自在マンダラの神々

北西にはパラマーシュヴァ(117)がいる。身色は緑色で緑色の四面¹⁹¹⁾を有する¹⁹²⁾。中央は忿怒を伴った恋情、右は暴虐のラサをそなえ、左はプラフマンのような面相である。あるいはまたこれらの三面の色は緑、青、白である。頭頂には緑色の馬の面がある。八臂で、右の第一臂は二重金剛杵と三本の旗を持ち¹⁹³⁾直立の形を、第二臂は三本の旗の形をつくり¹⁹⁴⁾、残りの二臂には剣と矢を持つ¹⁹⁵⁾。左手には楯を持った手で二重蓮華¹⁹⁶⁾を、残りの三臂で短槍、杖、弓を持つ。展右と展左の四足を有する¹⁹⁷⁾。右の第一足でインドラーニー Indrāṇī とシュリー¹⁹⁸⁾ Sri を、第二足でラティ Rati とプリーティ Pṛiti を、左の第一足でインドラ¹⁹⁹⁾ Indra とマドゥカラ²⁰⁰⁾ Madhu-kara を、第二足でジャヤカラ Jayakara とヴァサンタ Vasanta を踏んで立つ²⁰¹⁾。

3.2.3 上 下²⁰²⁾

マンダラの中尊の上の端にはウシュニーシャチャクラヴァルティン(118)がいる。身色は黄色で黄色の四面を持つ。あるいは、黄色、青、赤、白の四面を持つ。八臂で右手には円盤、鉤、剣、矢を、左手には鈴、羈索、数珠、弓を持つ。遊戯の姿勢で立つ。中尊の下にはスンバラージャ(119)がいる。身色は黒で²⁰³⁾、暴虐、寂靜、滑稽、恋情の各ラサをそなえた黒い四面²⁰⁴⁾を持つ。あるいはまた面の色は黒、白、赤、黄色である。八臂で、右手には金剛杵、鉤、剣、矢を、左手には鈴、羈索、戟、弓を持つ。展左²⁰⁵⁾で立つ。

3.2.4 まとめ

これらの十忿怒尊は二重蓮華と日輪の上に立ち、各々の面には赤い三眼²⁰⁶⁾、しかめた眉を有し、虎の生皮の上衣と下衣²⁰⁷⁾、頭蓋骨の環の頭飾をつけ、燃え上がって逆立つ褐色の毛髪を有し、褐色の髭をはやし、八匹の龍王とともに威嚇する²⁰⁸⁾。

4.3 八 供 養 女

この第三重の²⁰⁹⁾四維の内側にはトライローキヤヴィジャヤなどの忿怒尊四尊があり、それらの外側の線のさらに外側の南東をはじめとする四維を結ぶ線の右側には華女以下の四尊が、左側には金剛色女以下の四尊がいる²¹⁰⁾。

このうち[南東には]華女(120)がいる。身色は黄色、手に花の器を持つ。

[南西には]香女(121)がいる。身色は黒²¹¹⁾、手に香の容器²¹²⁾を持つ。

[北西には]燈女(122)がいる。身色は赤、宝の燈明の柄²¹³⁾を手にする。

[北東には]塗香女(123)がいる。身色は緑、貝殻でできた塗香の容器²¹⁴⁾を手にする。

[南東には]金剛色女(124)がいる。身色は黄色、鏡を手にする²¹⁵⁾。

[南西には]金剛声女(125)がいる。身色は緑、ヴィーナーを手にする²¹⁶⁾。

[北西には] 金剛味女²¹⁷⁾(126)がいる。身色は赤、塗香の容器²¹⁸⁾を手にする。

[北東には] 金剛触女²¹⁹⁾(127)がいる。身色はさまざまな色²²⁰⁾、さまざまな衣²²¹⁾を手にする。

これら八尊は【一面】二臂で宝冠を付け、さまざまな衣裳と宝石²²²⁾で覆われ、蓮華と月輪の上に²²³⁾薩埵趺坐を組む。

4. 第 四 重

4.1 護 方 神²²⁴⁾

第四の金剛族のマンダラの東方には白象アイラーヴィタ²²⁵⁾ Airāvata に乗ったインドラ(128)がいる。身色は黄色、右手に金剛杵を持ち、左手で明妃の乳房を触る²²⁶⁾。

南には水牛の上にヤマ(129)がいる。身色は黒²²⁷⁾、杖と戟を持つ。

西にはマカラ(海獣)の上にヴァルナ(130)がいる。身色は白、七匹の龍でできた傘蓋を有し蛇の索とほら貝を持つ²²⁸⁾。

北には人間の上にクベーラ(131)がいる。身色は黄色、鉤と棍棒を持つ²²⁹⁾。

北東には雄牛に乗ったイーシャーナ(132)がいる。身色は白、三叉戟²³⁰⁾とカバーラを手にし、頭蓋骨²³¹⁾と半月で鬚を飾り、肩から蛇の聖紐をかけ首が青い²³²⁾。

南東には山羊の上にアグニ(133)がいる。身色は赤で杓と水瓶を持つ²³³⁾。

南西には羅刹の王ナイルリティ(134)がいる。身色は青、死体の上に乗る。剣と楯を持つ²³⁴⁾。

北西には鹿の上にヴァーユ(135)がいる²³⁵⁾。身色は青、風の袋を持つ²³⁶⁾。

これら八尊は、四臂で右の第一臂に各々の第一の持物を持ち、自分と同じような姿をした明妃を抱いた左の第一臂に第二の持物を持つ。残りの二臂は頭上でマンダラの中尊に向かって合掌する²³⁷⁾。

4.2 ヒンドゥー教の至高神

イーシャーナの近くの外側に北東から順にプラフマンなどがある。

このうち、ハンサ鳥の上にプラフマン(136)がいる。身色は黄色、四面四臂²³⁸⁾、二臂で数珠と蓮華を持ち²³⁹⁾、残りの左右の手で合掌しながら²⁴⁰⁾杖と水瓶を持つ。

ガルダ鳥の上にヴィシュヌ(137)がいる。身色は黒で四臂、二臂で円盤とほら貝を持ち²⁴¹⁾、残りの左右の手で頭上で合掌しながら²⁴²⁾棍棒と弓を持つ²⁴³⁾。

法界語自在マンダラの神々

雄牛の上にマヘーシュヴァラ(138)がいる。身色は白、半月を飾った鬚を結い、四臂、二臂で頭上で合掌し、残りの手で三叉戟とカバーラを持つ²⁴⁴⁾。

孔雀の上にカールティケーヤ(139)がいる²⁴⁵⁾。身色は赤で六面²⁴⁶⁾、右の二臂で短槍と金剛杵を、左の二臂で野鶏と鈴を持ち、残りの二臂で合掌する²⁴⁷⁾。

これらの四尊は前と同様に自分と同じような姿をした明妃を抱く²⁴⁸⁾。

4.3 母 神²⁴⁹⁾

さて次にプラフマーニー(140)がいる。容姿や持物はプラフマンと同様である。

ルドラーーニー(141)はルドラと同様である。

ヴァイシュナヴィー(142)はヴィシュヌと同様である²⁵⁰⁾。

カウマリー(143)はカールティケーヤと同様である。

インドラーニー(144)はインドラと同様である²⁵¹⁾。

次にヴァーラーヒー(145)がいる。身色は黒、ふくろう²⁵²⁾に乗り、四臂である。左右の手でローヒタ魚とカバーラを持ち、残りの二臂で合掌する²⁵³⁾。

死体²⁵⁴⁾の上にはチャームンダー(146)がいる。身色は赤で四臂、左右の手で曲刀(kartri)とカバーラを持ち、残りの手で²⁵⁵⁾合掌する²⁵⁶⁾。

次にプリンギー(147)がいる²⁵⁷⁾。身色は黒でやせている。はじめの二臂で数珠と水瓶を持ち、残りの二臂で合掌する²⁵⁸⁾。

4.4 ガナパティなど

鼠の上にガナパティ(148)がいる。身色は白で象面、蛇の聖紐²⁵⁹⁾を懸け四臂である。右の二臂には三叉戟と甘菓子を、左の二臂には斧と大根を持つ²⁶⁰⁾。

マハーカーラ(149)。身色は黒、三叉戟とカバーラを持つ。

ナンディケーシュヴァラ(150)。身色は黒で太鼓に乗る。両手で太鼓を叩く。

4.5 九 星²⁶¹⁾

七頭立ての馬車の上に日天(151)がいる。身色は赤、左右の手で日輪を乗せた蓮華を持つ。

ハンサ鳥の上に月天(152)がいる。身色は白、左右の手で月輪を乗せた睡蓮を持つ。

山羊の上に²⁶²⁾火星(153)がいる。身色は赤、右手に鎌を、食べるような仕草で左手に人頭を持つ。

蓮華の上に水星(154)がいる。身色は黄色、弓矢を持つ。

蛙，もしくはカパーーラの上に²⁶³⁾木星(155)がいる。身色は白，数珠と水瓶を持つ。
 金星(156)。身色は白で蓮華の上に²⁶⁴⁾立つ。数珠と水瓶を持つ。
 亀の上に土星(157)がいる。身色は黒で，杖を持つ。
 ラーフ(蝕)(158)。身色は赤黒い色，太陽と月を両手に持つ。
 ケートゥ(彗星)(159)。身色は黒，剣と蛇の索を持つ。

4.6 バラバドラなど

象の上にバラバドラ(160)がいる。身色は白²⁶⁵⁾，剣と鉄を持つ。

コーキラ鳥(kokila)の引く車の上にジャヤカラ(161)がいる。[身色は緑色で²⁶⁶⁾]
 四臂，右の二臂に華鬘と矢と，右の二臂に杯(casaka)と弓を持つ²⁶⁷⁾。
 おうむの引く車にマドゥカラ(162)がいる。身色は白で四臂，右の二臂にマカラの
 幢と矢を，左の二臂に杯と弓を持つ²⁶⁸⁾。

猿の上にヴァサンタ(163)がいる。身色は白で四臂，右の二臂に矢と剣を，左の二
 臂に弓と杯を持つ²⁶⁹⁾。

4.7 八 龍 王

アナンタ(164)，ヴァースキ(165)，タクシャカ(166)，カルコータカ(167)，パドマ
 (168)，マハーパドマ(169)，シャンカパーーラ(170)，クリカ(171)がいる。七匹の龍で
 できた傘蓋を有し，合掌する。あるいは，各自，父が[右手に]持つ第一の持物²⁷⁰⁾を
 持って合掌する²⁷¹⁾。

4.8 八 阿 修 羅

ヴェーマチトリン(172)，パリン(173)，プラフーラーダ²⁷²⁾(174)，ヴァイローチャ
 ナ²⁷³⁾(175)等の偉大な阿修羅の王がいる。身色は黒，甲冑で²⁷⁴⁾武装し，剣や楯など
 のさまざまな武器を持つ。

4.9 ガルデーンドラなど

ガルデーンドラ(176)。合掌し，羽を広げる²⁷⁵⁾。身色は，足の膝までが白，膝から
 膝までが黄色，膝から首までが赤，首から頭が黒である。

ドゥルマキンナララージェーンドラ(177)。身色は橙色，ヴィーナーをひく。

パンチャシカ(178)。ガンダルヴァの王であり，身色は黄色，ヴィーナーをひく²⁷⁶⁾。

サルヴァールタシッダ(179)。呪文(vidyā)を護持するものの王であり，身色は

法界語自在マンダラの神々

白²⁷⁷⁾、華鬘を持つ。

4.10 八夜叉

プールナバドラ(180)。青。マーニバドラ(181)。黄色。ダナダ(182)。赤。ヴァイシュラヴァナ(183)。黄色。チヴィクンダリン²⁷⁸⁾(184)。赤。ケーリマーリン(185)。緑。ケーンドラ(186)。黄色。チャレンドラ(187)。黄色。プールナバドラをはじめとするこれらの夜叉の首領たちはシトロンの実とマングースを左右の手に持つ。

4

4.11 ハーリーティー

ハーリーティー(188)。身色は黄色、穀物を両手に持つ²⁷⁹⁾。幼児がいる。

4.12 二十八宿²⁸⁰⁾

婁宿²⁸¹⁾(189)。白。胃宿(190)。緑色。昴宿(191)。紺色。畢宿(192)。橙色。觜宿(193)。黒。参宿(194)。黄色。井宿(195)。黄色。鬼宿(196)。紺色。柳宿(197)。白。星宿(198)。黄色。張宿(199)。プリヤングのような緑色。翼宿(200)。金色。軫宿(201)。白。角宿(202)。金色。亢宿(203)。黄色。氐宿(204)。黒。房宿(205)。紺色。心宿(206)。黄色。尾宿(207)。黄色。箕宿(208)。黒。斗宿(209)。黄色がかった白。女宿(210)。白っぽい橙色。虛宿(211)。黒。危宿(212)。黄色。室宿(213)。金色。壁宿(214)。黄色。奎宿(215)。白っぽい橙色。牛宿(216)。紺色。

婁宿をはじめとするこれらの女神たちは、風になびく上衣と下衣をまとい²⁸²⁾合掌する。あるいはまた、これらの女神たちは車の上に立つと知られている。

4.13 まとめ

シャクラ Šakra(インドラ)を始めとする神がみは蓮華の上に立ち、各自、数えきれないほどの眷族たちに囲まれている。それぞれ、さまざまな衣裳や宝石などによって飾られ、マンダラの中尊である世尊(マンジュゴーシャ)に対し礼拝し、吉祥の頌歌をあらゆる方角に向かって歌う。

4.14 四攝菩薩

東方を始めとする四方の門に金剛鉤²⁸³⁾等の門衛(217-220)がいる。尊容は中心のマンダラ²⁸⁴⁾の四尊と同じである²⁸⁵⁾。

5. 部族の規定

さて、偉大なヴァイローチャナ Vairocana を本質とする世尊マンジュゴーシャ²⁸⁶⁾は清浄なる法界の智恵を自性とし、自らに似た金剛薩埵の印をつける。

大円鏡智をはじめとする四智を順に自性とする阿閻等の四如来²⁸⁷⁾と八仏頂、ローチャナーはマンジュゴーシャの印をつける。

金剛薩埵等の東方の四菩薩、マーマキー、金剛鉤、十二地、法無礙、ラースヤー、普賢等の東方の四菩薩、十忿怒尊、歌女、色女²⁸⁸⁾、そして、第四重の東方²⁸⁹⁾に位置する神がみは阿閻の印をつける。

金剛宝等の西方の四菩薩、金剛索、十二波羅蜜、義無礙、鬘女、虚空庫等の南方の四菩薩、香女、声女、第四重の南方に位置する神がみは宝生の印をつける。

金剛法等の西方の四菩薩、パーンダラー、金剛鑓、十二自在²⁹⁰⁾、詞無碍、華女、觀自在等の西方の四菩薩、燈女、味女、第四重の西方に位置する神がみは阿弥陀の印をつける。

金剛業等の北方の四菩薩、金剛鈴、十二陀羅尼、弁無碍、舞女、無量光等の四菩薩、塗香女、触女、第四重の北方に位置する神がみは不空成就の印をつける。

6. マントラの規定

マンジュゴーシャの心種子²⁹¹⁾は「ムーッフ」(mūḥ) である。「ア、アーハ²⁹²⁾、すべての如來の真髓よ、行え、オーン、フーン、フリーヒ、世尊よ、知恵の化身よ、言葉に自在なるものよ、偉大な言葉を語るものよ、すべての存在物をそなえたものよ²⁹³⁾、虚空のごとく無垢にして清浄なる法界の智の源よ、アーハ」というのが心マントラ²⁹⁴⁾である。「オーン、アムリタクンダリンよ、ヴィグナーンタカよ、フーン」というのがアムリタクンダリン²⁹⁵⁾ Amṛtakundalin のマントラで、すべての行為のためのマントラ²⁹⁶⁾である。

訳 註

1) マンダラの觀想法では、まずははじめにマンダラの尊格を生み出すための理想的な「場」を設定しなければならない。[立川 1986b: 74-76] によれば、象徴的な文字 (bijā: 種子) から、

金剛でできた防御壁である金剛牆 (vajraprākāra) と金剛籠 (vajrapañjara), そして金剛の大地 (vajrabhūmi) などを生み出す。

- 2) 前章のマンダラとは NPY 第20章の「文殊金剛マンダラ」を指す。ただし、第20章では、金剛籠などの観想方法は NPY 第1章「秘密集会文殊金剛マンダラ」を参照するよう指示されている (NG40, 2-3)。第1章には、金剛牆、金剛籠、そしてヤマーンタカ以下の十忿怒尊の観想法が説かれている (NG1, 20-2, 9)。
- 3) 十忿怒尊はマンダラの四方四維上下を守る十尊のグループで、名称と位置は次のとおりである。ヤマーンタカ Yamāntaka (東), プラジュニャーンタカ Prajñāntaka (南), パドマーンタカ Padmāntaka (西), ヴィグナーンタカ Vighnāntaka (北), アチャラ Acala (北東), タッキラージャ Takkirāja (南東), ニーラダンダ Niladañḍa (南西), マハーバラ Mahābala (北西), ウシュニーシャチャクラヴァルティン Uṣṇīśacakravartin (上), スンバラージャ Sumbharāja (下)。以上の十尊は護輪 (rakṣācakra) という名の車輪状の武器に乗ってマンダラを妨害者たちから護衛する。護輪には、各尊が乗る十本の幅があるため十幅輪 (daśāracakra)とも呼ばれる。十忿怒尊に関しては [羽田野 1957: 42-44] [BHATTACHARYYA 1968a: 252-256] [MALLMANN 1964: 111-134] [頬富 1985: 162-164] [立川 1987a: 132] 参照。
- 4) 「3. 2 忿怒尊」参照。
- 5) NPY 第20章「文殊金剛マンダラ」では、仏塔 (caitya) が、尊格の住居である樓閣の「容器」として観想される。ただし、実際の図像例には仏塔は表現されない。
- 6) 二重蓮華は文字どおりには「あらゆる方向に花弁を開いた蓮華」であり、実際の図像例では上下二方向に花弁を開いた蓮台として表現される。
- 7) 金剛結跏趺坐は、結跏趺坐 (paryāṅka) の仏教タントリズム流の呼称であり、実際には両者は同じ姿勢である。結跏趺坐については [逸見 1935: 164-166] 参照。
- 8) GGN192, 4, 3: 満月の輝きをそなえた御身；チャンキヤ 13, 1, 7: 身色は黄色。
- 9) 金剛杵、宝、蓮華、二重金剛は、順に阿閦、宝生、無量光、不空成就の四仏のシンボルである。このうち、二重金剛は日本では羯摩杵と呼ばれ、金剛杵を十字に交差させた形態を持つが、本来は「あらゆる方向に先端（鉢）を向けた金剛杵」という意味である。
- 10) [上村 1985: 571]によれば、ラサとは「芸術作品を鑑賞するとき、鑑賞者に生じる美的快感」であり、伝統的には恋情 (śṛṅgāra), 滑稽 (hāsyā), 慈悲 (karuṇā), 暴虐 (raudra), 勇猛 (vīra), 恐怖 (bhayāṅka), 嫌惡 (bībhatsa), 驚異 (adbhuta) の八種類がある。ただし NPY にはこれ以外のラサも登場する。
- 11) GGN192, 2, 2: 恋情などのラサ。チャンキヤはラサへの言及を欠く。
- 12) GGN はこの他にマンジュゴーシャの特徴として「若者の飾りによって飾られ、三十二相八十種好をそなえる」(192, 2, 3) をあげる。パンチエンは「各面は三眼をそなえる」(95, 4) とする。マンジュゴーシャの実際の作例は [CLARK 1965: 115 (4M1)] [LOKESH CHANDRA 1986: 373 (P1. 1002)] 参照。なお、[CLARK 1965] にはこのほかに第二重の女尊の作例も含まれる（詳しくは [田中 1985: 53-56] 参照）。
- 13) プトン 339, 4 と GDK457, 6 は白傘蓋仏頂と光聚仏頂の順序が逆である。[田中 1987: 178] はこれに従う。
- 14) 捨除仏頂のチベット訳には 'od zer rnam par 'phro ba (NT₁₋₃, AT₁, パンチエン 96, 1, チャンキヤ 13, 2, 4); rnam par 'gro ba (NT₄); rnam par 'thor ba (GGN192, 2, 7, プトン 339, 4, GDK458, 1) の三種類がある。

- 15) NT₁₋₃, AT₁: rgyal ba (勝 [仏頂]); NT₄: rgyal ba'i stob (勝力 [仏頂])。
- 16) NT₁₋₃, AT₁: gyen du gzung ba (上向きに握る); NT₄: gyen du strong bar brtson pa (上向きに立てるようとする)。
- 17) NT₁₋₃: rang gyi gdan la mnon pa (自分の座をおさえる); NT₄: rgyab ngos nas rang gi gdan gnān pa ([左手の] 甲で自分の座をおさえる); AT₁: rang gi gdan la brten pa'o (自分の座によりかかる)。
- 18) 面とラサの対応が NT₄ は他のテキストと異なる。NT₄: khro ba dang bcas pa/ g'yas pa'i zhal dkar po sgeg pa/ nub ser po drang po'i zhal gdangs pa/ g'yon pa dmar po dpa' ba mche bas ma mchu mnān pa//。他のテキストが中央の面を「忿怒をともなった恋情のラサ」とするのに対し、NT₄ は「忿怒をともなったラサ」とし、恋情のラサを次の右面に対応させる。そのため以下後ろの面が「暴虐のラサ」に、左の面が「勇猛かつ牙をむき下唇を噛む」となる。
- 19) 「タルジャニー」は人差指を突き立てた手の形で、彈劾、威嚇を示す。同時に羈索を持つことも多い。[BHATTACHARYYA 1968b: 439] [LIEBERT 1976: 295-296] 参照。
- 20) 清水：馬。
- 21) パンチエン 96, 5: 青。
- 22) NT₄: lcags kyu 'dzin pa'o (鉤を持つ)。
- 23) GGN192, 5, 2: 弓、羈索。
- 24) NPY にはラサの指定はないが、GGN は「恋情などのラサをそなえる」(192, 5, 4) とする。
- 25) Skt.: vajrabhāṣa (金剛語) に対応する語が、NT₁₋₃, AT₁ では rdo rje bsrung ba (金剛護) である。NT_{2,4} は Skt. に一致する。チャンキヤも「金剛護」(13, 3, 6) とする。
- 26) ガルダ鳥 Garuḍa は半人半鳥の想像上の生き物で、ヴィシュヌの乗り物として知られている。[DOWSON 1973: 109-110] 参照。
- 27) GGN は不空成就の身色と中央の面の色を黒、右の面を白とする (192, 5, 5-6)。
- 28) AS₂ は「寂静の」から、十二地の第9番不動地の「蓮華の茎を」(NG55, 23) までを欠く (AS₂141b, 7)。
- 29) GGN192, 5, 7: 鈴、弓、タルジャニー。
- 30) NT₁₋₃: chibs (御馬); NT₄: phyibs (意味不明、chibs の誤りか? [JASCHKE 1980: 157] chibs の項参照); AT₁: bzhon pa (乗り物)。
- 31) 清水：開敷蓮月。
- 32) 清水：宝髻冠。
- 33) Skt.: vicitraratnābharaṇāmbarā ratnamukutināḥ のチベット訳はテキストによって解釈が異なる。AT₁₋₃: rad na sna tshogs dang gos kyis brgyan pa/ rin po che'i cod pan can no (さまざまな宝石と衣裳で飾られ、宝冠をつける); NT₄: rin po che sna tshogs kyis brgyan pa/ mdzes pa'i bza' bsnams pa rin po che'i cod pan can no (さまざまな宝石で飾られ美しい衣裳を身につけ宝冠をいただく); AT₁: rad na sna tshogs dang gos cod pan can no (さまざまな宝石と衣裳、冠を有する)。なお、カトマンドゥ市内の仏教寺院チュシュヤ・バハール Chusya Bahal には、これらの四如来と中尊マンジュゴーシャがほおづえに彫刻されている [VAN KOOIJ 1977: 51-56]。
- 34) パンチエン 96, 4; 95, 5; 97, 1; 97, 2: 東をはじめとする四方に。
- 35) NT₄: dal chen mo (大マンダラ)。
- 36) 末尾の補遺参照。

法界語自在マンダラの神々

- 37) [清水 1983] には「これに関しては、・・・という説もある」の部分は含まれない。
- 38) NT₄: re'u mig (小部屋)。
- 39) アバヤーカラグプタは VA の中で、薩埵跏趺坐を「左足の大腿の上に右足を置き、左足を右足の大腿の下に置く」坐法であると説明している (VS₁31, 5-6)。
- 40) NS₁₋₂ は tārā を欠く。
- 41) NT₄: mi skyod pa dang/ rin chen 'byung ldan dang/ snang ba mtha' yas dang/ (阿閦と宝生と阿弥陀と)。
- 42) 清水：赤白色。GGN193, 3, 3: 白。
- 43) 清水：金剛と鉤を持ち。GGN193, 3, 3: 金剛の鉤を持ち；パンチエン 97, 5: 鉤を持ち。
- 44) 左足を曲げ右足をその反対方向に伸ばして立つ姿勢である。[逸見 1935: 159] 参照。
- 45) 清水：金剛と索を持ち。パンチエン 97, 5: 眉索を持ち。
- 46) 展右の左右の足を逆にした姿勢である。
- 47) NT₄: rdo rje dang lcags sgrog (金剛と鎖)。清水：金剛と鎖。
- 48) VA によればヴァイシャーカ歩とは「両足を26アングラ(約 50 cm)外側に向けて開き、両膝を曲げた」姿勢である (VS₁25, 3-4)。
- 49) 清水：金剛と鈴。GGN193, 3, 5: 金剛と鈴。
- 50) VA では、マンダラ歩は「ヴァイシャーカ歩の両足の間隔を2ハスタ(約 90 cm)にしハシサ鳥の翼のような形にした」姿勢と規定される (VS₁25, 4)。
- 51) 清水：四菩薩
- 52) NT₄ は「一面」に対応する語を欠く。
- 53) チベット訳はテキストによって解釈が異なる。NT₁₋₃: dbu skra dmar gser gyen du brdzes pa smra ra dmar ser dang ldan pa (褐色の逆立った髪と褐色の髭を有し)；NT₄: dbu skra dmar po gyen du brdzes shing rmang ra dmar po dang ldan pa (赤い髪は逆立ち、赤い髭を有し)。AT₁ は Skt. に一致する。
- 54) NT: klu chen (大龍)。
- 55) 八匹の龍について NPY 第11章「ヴァジュラフーンカーラマンダラ」は、中尊ヴァジュラフーンカーラ Vajrahūmkāra の装身具として次のように詳細に述べる。
褐色の髪には青いアナンタ Ananta を巻き付け、赤いタクシャカ Taksaka は耳飾りにし、蓮の根のよう白いマハーバドマ Mahāpadma は瓔珞にし、ダルバ草のよう緑色したカルコータカ Karkotaka は聖紐にし、白いヴァースキ Vāsuki は腰紐にし、黒く美しいパドマ Padma は足輪にし、黄色いシャンカパーラ Śāṅkhapāla は腕钏にし、煙のような雑色のクリカ Kulika は臂钏にして巻き付ける (NG24, 6-9)。
- 56) GGN193, 3, 5, パンチエン 98, 1: 鮎羅尼のマンダラ (gzung kyi dkyil 'khor)。
- 57) NT₄: sa bcu'i dbang phyug rnam (十地の王たち)。
- 58) NT: zhal cig phyag gnyis (一面二臂)。
- 59) 清水：蓮華。パンチエン 98, 1: 蓮華。
- 60) GGN193, 3, 7: ルビーの色。
- 61) パンチエン 98, 1-2: 般若経の経函。
- 62) GGN193, 3, 8: 水晶の色。
- 63) GGN193, 3, 8-4, 1: 朝焼けの色。
- 64) 清水：月輪。

- 65) パンチエンは「日輪をのせた」を欠く(98, 2)。
- 66) NT₄: mar gad lta bu'i mdog ljang khu dmar po can (赤と緑の混じった緑宝色)。
- 67) NT₄ mdun la gnas pa'i lag pa na (前に置いた手に)。清水：さしあげて。
- 68) パンチエン 98, 3: 般若経の経函を持つ。
- 69) AT₁: sna tshogs chu skye dang sna tshogs rdo rje (二重蓮華と二重金剛杵)。
- 70) AT₁: nam kha'i mdog can (虚空の色をそなえ)。
- 71) NT₄: zla ba la gnas pa'i lag pa dang rkyal gyis ma ra ga ta'i rdo rje (月の上にある上を向けた手で五鉢杵を[難勝地の記述の混入か?]!)。
- 72) 清水：昼蓮華。
- 73) [清水 1983] は sagarvam の訳語を欠く。
- 74) GGN193, 4, 4: 橙色。
- 75) GGN193, 4, 5: 仮地 (sangs rgyas kyi sa)。
- 76) AS₁ は ahna を欠く。NT₁ も ahna に対応する語を欠く。
- 77) NS_{1-2, 4}, AS は amitābha を欠く。Tib. はいずれも amitābha に対応する語を欠く。
- 78) NT₁₋₃: bde bar gshegs pa'i sku gzugs (善逝の御像); NT₄: bde bar gshegs pa'i sku (善逝の御からだ)。
- 79) GGN193, 4, 6, チャンキヤ 13, 5, 5: 正等覚を示す仏像をのせた蓮華を持つ; パンチエン 98, 4: 仏像を持つ。
- 80) NT₄: me'i mtshams nas lho'i phogs su (南東よりはじめて南には)。
- 81) GDK464, 2: 衆生のあらゆる願いを成就させるために如意宝珠を胸に持つ。
- 82) NT₄: phyag gnyis lhag pas bzhi pa'o (さらに二臂あるため四臂である)。
- 83) AT₁: nyi ma (太陽)。清水：財宝。GGN193, 5, 2: さまざまな宝と穀物の穂。
- 84) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT₁₋₃: mya ngan med pa'i yal ga dang bcas pa'i me tog gi chun po (無憂樹の枝のついた花房); NT₄: yal ga dang bcas pa'i me tog gi sngong po (枝のついた花の[以下意味不明]); AT₁: yal ga dang bcas pa'i mya ngan med pa'i me tog gi chun po (枝のついた無憂樹の花房)。
- 85) Tib.: pad ma dkar po (白蓮)。
- 86) 清水：黄金色。
- 87) GGN193, 5, 5, プトン 345, 2: 右手では転法輪印を示し、左手には般若経の経函を持つ。
- GDK は蓮華を持たず、直接、般若経の経函を左手に持つ以外は NPY に一致する(463, 4-5)。
- 88) 「プリヤング (priyaṅgu)」は植物の名称であるが、何を指すかについてはアワ、カラシナなど諸説がある[満久 1977: 151-152]。
- 89) NT₁₋₃ ral gri dang rdo rje (剣と金剛杵)。
- 90) GGN193, 5, 6: 白い蓮華。
- 91) パンチエン 99, 2: 紺色。
- 92) GGN193, 5, 8, パンチエン 99, 3, チャンキヤ 14, 1, 4: さまざまな宝で出来た果実。
- 93) 清水：葉波羅蜜。
- 94) NT₄: lho nub nas brtsams nas nub du (南西よりはじめて西には)。
- 95) NG, NS: dvādaśavaśītā; AS: daśavaśītā. Tib. も NT は「十二自在」、AS は「十自在」である。
- 96) チャンキヤ 14, 2, 3: 赤い睡蓮。

法界語自在マンダラの神々

- 97) NT₄: tshe dbang ba dkar mo (白い命自在)。
- 98) NT₄: snang ba m̄ha' yas (無量光)。GGN194, 1, 3-4: 禅定に入った無量寿仏。パンチエンは「ルビーの上に坐し」という規定を欠く(99, 5)。
- 99) NG: raktapañcasūcikavajradharā; NS₂₋₄, AS: raktapañcaśūkavajradharā; NS₁: viśvavarṇā vividhavarṇajātilatāhastā [NS₁ は十二自在の第6番生自在の記述の混入か?]。
- 100) 清水: 緑色。パンチエン 99, 6: 緑。
- 101) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT₁₋₃: mc tog 'dza' ti kha dog sna tshogs pa'i yal 'dab (さまざまな色のジャーティ花の枝); NT₄: kha dog sna tshogs pa'i khri shing (さまざまな色のジャーティ) : AT₁: snam pa sna tshogs pa'i mdog can gyi dza' ti'i khri shing (さまざまな種類の色をそなえたジャーティの木)。パンチエンは単に「ジャーティの枝」とする(99, 6)。なお、ジャーティ(jāti)は、ナツメグとジャスミンのいずれにも用いられる。
- 102) 清水: 空のような暗色。GGN194, 1, 6: 緑。
- 103) 清水: 蓮華の上に月輪を置く。
- 104) 清水: 蓮糸。
- 105) GGN194, 1, 7: プリヤングの花房。
- 106) NG: sitā raktavarṇa を NS₂₋₃: sitaraktavarṇā とする。NS₁: raktavarṇa-; AS₁: raktā; AS₂: sitaraktā; NT₁₋₃: dkar mo (白); NT₄: dimar po (赤); AT₁: dkar mo (白); GGN194, 1, 8: 白みをおびた赤; パンチエン 100, 1: 赤。このように法自在の身色には白、赤、そして白みをおびた赤の三種類がある。
- 107) NT₄ は bhadra に対応する語を欠く。パンチエンは単に「瓶」とする。
- 108) パンチエンはここまで十尊について、面数、臂数、右手の持物の規定をここで述べる。(100, 1-2)。GGN は仏菩提女のあとに「これら二尊(如是女、仏菩提女)の坐法、頭飾などは自在女たちと同様である」と述べる(194, 2, 2-3)。
- 109) 清水: 如是自在。GGN は「如是女」の語を欠く。
- 110) AS: ratnmañjarī (宝の房) と AT: rdo rje rin po che'i snye ma (金剛宝の房) は一致していない。GGN194, 2, 1: 宝で出来た木の枝; パンチエン 100, 1: 金剛宝の房。
- 111) GGN は「ほこらしげに」という規定を欠く。
- 112) 清水: 善意陀羅尼女。
- 113) GGN194, 2, 6: 針と糸。
- 114) GGN194, 2, 7: 木の葉の集まり。
- 115) GGN194, 2, 8: 黄緑。
- 116) パンチエン 100, 5: 宝の瓶をのせた蓮華を手にする。
- 117) NT₄: spyi blugs la 'phyang ba'i bzlas pa'i phreng ba (水瓶に懸けられた数珠)。
- 118) [清水 1983] は剣に関する記述を欠き、単に「青蓮」とする。
- 119) 清水: 三鈷金剛の印をつけた瓶。
- 120) NT₁₋₃, AT₁: dpe sgrom (經函); NT₄: snod (容器)。GGN194, 3, 3: さまざまな色の小箱。
- 121) NT₄ は「羈索」に対応する語を欠く。
- 122) NT₁₋₃: pad ma'i ra ga (ルビー)。
- 123) Skt.: ratnapāśa を Tib.: rin po che'i zhags pa に従い「宝の羈索」と解釈する。清水: 宝珠と索; Mallmann: le joyau et la corde.
- 124) GGN194, 3, 6: 赤みをおびた白。

- 125) NT₁₋₃, AT₁: mtha' gnyis su padmas mtshan pa'i lcags sgrog (両端に蓮華のついた鎖) : NT₄: phyag gnyis na padmas mtshan pa'i lcags sgrog (両手に蓮華のついた鎖)。清水：両手に蓮花の印をつけた鎖を持つ。
- 126) GDK467, 4: 金剛喜女。
- 127) 清水：黄色。GGN194, 3, 8: 赤みをおびた白。
- 128) NG, NS₁₋₃, AS₂: vādayantī; NS₄, AS₁: vādayanti. 清水：持つ。
- 129) プトン 348, 5, GDK467, 5: 金剛舞女。
- 130) NG: trisūcikavajraghaṇṭā を NS₃₋₄, AS₂: triśūkavajravajraghaṇṭā とする。NS₁₋₂, AS₁: triśūkavajraghaṇṭā. NT₁₋₃, AT₁: rdo rje rtse gsum pa dang dril bu (三鉢金剛杵と鈴); NT₄: rdo rje rtse gsum pa dang rdo rje dril bu (三鉢金剛杵と金剛鈴)。NT₄ は NS₃₋₄, AS₂ に一致する。
- 131) GGN194, 4, 2: 手で最勝の遊戯と舞をなさり, それ以外は喜女と同様である; プトン 348, 5: 両手で最高の舞をなさる; GDK467, 6: 最高の舞をなさる。
- 132) NT₄: rin po che'i rgyan sna tshogs dang/ rin po che'i cod pan sna tshogs dang ldan pa (さまざまな宝石とさまざまな宝冠を有し)。
- 133) Tib. は「あるいは」以下の解釈がテキストによって異なる。NT₁₋₃: gzhan de rnams kyang zla ba la gnas pa zhes zer ro (また, これらの者たちも月輪に住しているといわれる); NT₄: de dag la'ang gzhan dag ni zla ba la gnas pa'o zhes so (これらの者たちについて, 他の者たちは月輪に住しているという); AT₁: gzhan dag ni de rnams kyang zla ba la gnas pa'o (他の者たちは月輪によればこれらの者もまた月輪に住している)。[MALLMANN 1964: 88] は「ただし, 門衛は」以下を「あるものによれば, 門衛たちは日輪にいる。他の者に従えば, 彼らは月に住している」と訳す。[清水 1983] にはこの部分の和訳は含まれない。
- 134) GGN には「2.7 まとめ」に相当する部分はない。プトン, GDK には門衛の位置に関する規定はない。パンチェン 101, 6, チャンキヤ 14, 4, 2 には「門衛は日輪の上に住する」とのみあり, 月輪についての言及はない。
- 135) GDK468, 1: 法マンダラ (chos dkyil)。
- 136) Tib.: dbang ldan nas brtsams nas (北東よりはじめて)。
- 137) GGN194, 4, 5: 法を示すしぐさで。
- 138) NS₁: vāmena kamaṇḍalu; NS₂: mena kamaṇḍalu; NT₁₋₃, AT₁: g'yon pas mi 'jigs pas padma (左手は施無畏 [印] で蓮華を); NT₄: g'yon pas mi 'jigs pa'i phyag rgyas sphu blugs kyi bum pa (左手は施無畏印で水瓶を)。NT₄ の持物の水瓶は NS₁₋₂ に一致する。
- 139) NT₁₋₃: rad na sna tshogs (さまざまな宝); NT₄: rin po che sna tshogs (さまざまな宝); AT₁: rin po che thams cad (あらゆる宝)。
- 140) 清水：与えつつ。
- 141) NT₄: yid sbiyin gyi nor bu [yid bzhin gyi nor bu の誤り ?]. GGN194, 4, 7: 如意宝幢; パンチェン 102, 2, チャンキヤ 14, 1, 5: 宝。
- 142) NT₁₋₃, AT₁: bum pa bzang bo la 'phyang ba'i dpag bsam gyi shing (吉祥の瓶に懸けられた如意樹); NT₄: bum pa bzang bo 'phyang ba'i dpag bsam gyi shing (吉祥の瓶を懸けた如意樹)。GGN194, 4, 8: 吉祥の瓶に懸けられた如意樹; パンチェン 102, 3: 吉祥の瓶から下がった如意樹。
- 143) GGN349, 3: 宝を与えるようにする。

- 144) 清水：大海懸菩薩。
- 145) NS₁ と AS は vajra を欠く。NT は NG に、AT は AS にそれぞれ一致する。GGN194, 5, 1: 左手には剣を持つ。
- 146) NS₁ と AS は dala を欠く。NT₁₋₃ は NG に一致する。NT₄ は NS₁ と同じく dala に対応する語を欠く。AT₁ は AS に一致する。
- 147) GGN194, 5, 2-3: 身色は白、無量光の化仏をつける。
- 148) NT: chu skyes dkar po(白蓮)。パンチェン 102, 4, チャンキヤ 14, 4, 8: 赤蓮華。
- 149) NT₄: zla bas mtshan pa'i padma (月を印とする蓮華)。
- 150) NT₄: padma nyi mas mtshan pa (太陽を印とする蓮華)。
- 151) GGN194, 5, 5: 二重金剛杵。
- 152) NG, NS₁₋₂: cchoṭikām を NS₃₋₄, AS: cchoṭikām dadat とする。ただし、NT は dadat に対応する語を欠く。
- 153) GGN194, 5, 7: さんせんと輝く五鈷金剛杵。
- 154) NT₄: pad ma (蓮華)。
- 155) GDK470, 1-2: 観音を除き、宝冠をいただく。観音は無量光の化仏を額に付けている。訳註147) 参照。
- 156) NT₁₋₃: rin po che sna tshogs dang gos sna tshogs kyis brgyan pa (さまざまな宝石とさまざまな衣裳で飾られる)。
- 157) GGN は四維、四方の順である。
- 158) NS₁ は sañmukhah sadcaranah を欠く。AT₁ は「六足」に対応する語を欠く。
- 159) GGN195, 3, 5-6: 弓、鈴。
- 160) 面の色は中央の面が青、以下、右回りに青、白、黄、赤、緑で、これらの上に青い第六面がのる。足の姿勢は一対で展右、一対で展左、もう一対で金剛結跏趺坐をする (NG 51-52)。
- 161) NT₄: lho phyos kyi sgor (南門には)。
- 162) 清水：嫉妬ラサ。
- 163) NT₄ は Skt.: mahā に対応する語を欠く。清水：忿怒ラサ。
- 164) 面の色については、GGN および、いずれの注釈書も身色と同じであるとのみ説き、各面が異なる説はあげられていない。これは他の忿怒尊においても同様である。
- 165) GGN195, 4, 3: 鉤を持ってタルジャニーを示す。
- 166) AT₁ は Skt.: hrdayaṅkuśam vajra- に対応する語を欠く。
- 167) NT₄ には身色に関する記述がない。
- 168) GGN195, 4, 3: 左手は第一臂でタルジャニーを示し、残りの手で羈索と弓を持つ。
- 169) GGN はこのあとに「恋情などのラサをそなえる」と述べる (195, 4, 5)。
- 170) 「金剛縛」とは両手を固く組む手つきである。
- 171) NT₁₋₃: rdo rje dril bu (金剛鈴); NT₄: rdo rje dang/ dril bu (金剛杵と鈴); AT₁: dril bu (鈴)。GGN195, 4, 5: 鈴; GDK471, 5: 金剛と鈴。
- 172) 四維の四尊の尊容は GGN と NPY の間でかなりの異同が見られる。このうち、GGN のトライローキヤヴィジャヤ、ヴァジュラジュヴァーラーナラールカ、パラマーシュヴァの記述は、順に『成就法の花環』*Sādhanamālā* [BHATTACHARYYA 1968b] Nos. 262, 263, 261 とよく一致する。なお、トライローキヤヴィジャヤの作例として [HUNTINGTON 1984: Pl. 110] が GGN のものによく一致する。

- 173) NT₄: sngon po zhal bzhi ba (身色は青、四面である)。
- 174) [清水 1983] は面色の規定に触れていない。
- 175) ヴァジュラフーンカーラ印は降三世印とも呼ばれる。VA は、降三世印を「金剛杵と金剛鈴をもつ両方の金剛の拳の甲を合わせて、両方の小指をからめ、両方の人差指を伸ばす」(VA₁ 34, 2-3) と規定する。[GETTY 1962: 20] と [GORDON 1978: 23] の解説と図像例では小指をからめていない。清水：金剛剣字印。
- 176) 清水：載。
- 177) GGN195, 1, 3-4: 左手には弓、羈索、金剛杵を持つ。
- 178) 清水：頭。
- 179) AT₁ は Skt.: kṛṣṇa に対応する語を欠く。これは NG と一致する。
- 180) GGN195, 1, 6: 慈悲など。
- 181) GGN195, 1, 7-8: さまざまな旗。
- 182) カトヴァーンガは先端に頭蓋骨などを連ねた棒である。[GORDON 1978: 17] [MALLMANN 1975: Pl. II-8] 参照。
- 183) GGN195, 2, 1: 展左。
- 184) ヴァジュラジュヴァーラーナラールカの尊容について、GGN はこのほかに八龍の装身具をあげる (195, 1, 8-2, 1)。
- 185) NT₄ は面色の青への言及を欠く。
- 186) NT₁₋₃: rab tu dga' ba'i bzhad pa (歓喜の笑い); NT₄: rab tu dga' bar byed pas myos pa (歓喜させることによって酔いしれ); AT₁: rab tu dga' bas bzhad pa (歓喜による笑い)。清水：酩酊。
- 187) GGN195, 2, 2: 先端の輝く金剛杵。
- 188) カパーラは人間の頭蓋骨で作った容器である。[GORDON 1957: 15] [MALLMANN 1975: Pl. II-10] 参照。
- 189) NT₁₋₃: rlung gis gos (風による衣 [gis は gi の誤りか?]); NT₂₊₄: rlung gi gos (風の衣); AT₁: rlung ras (風布)。
- 190) GGN はヘルカヴァジュラの持物を以下のように規定する。右の第一臂は先端の輝く五鈷杵、左の第一臂は旗と鈴を付けたカトヴァーンガ、左右の第二臂でマハーバイラヴァの生皮を外衣のように持つ。左右の第三臂で矢と弓、右の第四臂で血の溢れるカパーラ、左の第四臂で肉に満ちたカパーラをそれぞれ持つ (195, 2, 3-5)。
- 191) NG, NS₃: śyāmaḥ catur- を NS₄, AS: śyāmaḥ śyāmacatur- とする。NS₁₋₂ は śyāmacatur- である。Tib. は NT₁₋₃ が NS₁₋₂ に、NT₄ が NS₄, AS に、AT₁ が NG, NS₃ にそれぞれ一致する。
- 192) GGN195, 2, 7: 三眼をそなえる。
- 193) NT₄: sna tshogs rdo rje ba dan dang bcas (二重金剛杵と旗をともない) : AT₁ は sna tshogs rdo rje ba dan dang ldan pas (二重金剛杵、旗をともなって)。
- 194) 右の第一、第二臂に関して GGN は「(第一臂で) 三本の旗のように二重金剛杵を威嚇の手つきで持ち……(第二臂で) 三本の旗のように直立の手つきをする」(195, 2, 8-3, 1) とする。
- 195) AT₁: gsum pas ral gri/ bzhi bas mda' (第三臂には剣を、第四臂には矢を持つ)。清水：剣、弓を。
- 196) NT₄: padma (蓮華)。GGN195, 2, 8 : カトヴァーンガと二重蓮華。

法界語自在マンダラの神々

- 197) GGN195, 3, 2: 展左の四足を有する。
- 198) GGN195, 3, 2: インドラとインドラーニー。プロトと GDK は NPY に一致する。
- 199) GGN195, 3, 3: シャクラ; パンチエン 105, 1: インドラーニー。
- 200) GGN195, 3, 3: ヴィシュヌ。
- 201) パラマーシュヴァに踏みつけられるこれらの神がみはヒンドゥー教の神である。インドラーニー, シュリー, ラティ, プリーティは, 順にインドラ, マドゥカラ, ジャヤカラ, ヴァサンタの妻である。
- 202) GGN は上下の忿怒尊を含まない。
- 203) パンチエン 105, 2: 青。
- 204) NG, NS₁: -anvitacaturvaktrah を NS₂₋₄: -anvitakṛṣṇacaturvaktrah とする。AS は -anvitalī kṛṣṇacaturvaktrah である。NT₁₋₃ は NS₂₋₄ に, NT₄ は NG, NS₁ に, AT₁ は AS にそれぞれ一致する。
- 205) NS₁ は ālidha で写本の第62葉の表が終わり, スンバに関する記述もここで終わっている。NG で Bhāṭṭācāryya が用いた写本 B は, NS₁ との共通点が数多く認められるが, この箇所は葉の途中にもかかわらず NS₁ と同じくスンバの記述は ālidha で終わっている。これは写本 B が NS₁ 以降に成立し, その系統に属するためであると考えられる。
- 206) NS₄, AS: raktavartulatrinetrāḥ (赤く丸い三眼)。
- 207) 清水: 虎の皮の上衣をまとい。
- 208) 清水: 八竜を飾っている。
- 209) NG: -maṇḍalasya を NS, AS: -maṇḍalasyaiva とする。Tib. は AT₁ にのみ, eva に対応する語である nyid が認められる。
- 210) GGN は華女以下の四尊は四維に, 金剛色女以下の四尊は四方の門に住するとする (195, 5, 1-3)。
- 211) パンチエン 105, 6: 青。
- 212) Tib. より 「香の容器」と解釈する。Skt.: kaṭacchū は意味が明らかではない。清水: 香炉。
- 213) 清水: 宝灯竿。GGN194, 1, 8: 灯明の柄。
- 214) 清水: 香具。
- 215) GGN195, 5, 1: 右手に鏡を持つ。
- 216) GGN195, 5, 2: 金剛のヴィーナーを手にする。
- 217) GGN195, 5, 2: 金剛香女 (rdo rje dri)。
- 218) パンチエン 106, 1, チャンキヤ 15, 4, 7: 味覚の器 (ro'i snod)。
- 219) GGN195, 5, 3: 金剛味女 (rdo rje ro ma)。
- 220) パンチエン 106, 1: 緑。
- 221) GGN195, 5, 3: 味覚の器。
- 222) NS₁₋₂ は ratna (宝) のかわりに rakta (赤い) とある。
- 223) [清水 1983] は座を「月輪の中で」とする。
- 224) 護方尊 (dikpāla) は世界を守ると考えられたヒンドゥー教の神がみで, 護世神 (lokapāla) とも呼ばれる。[BANERJEA 1974: 519-529] 参照。なお, NPY は護方神を四方, 四維の順に説くが, GGN は北東のイーシャーナから順に右回りに説く。
- 225) 神がみがアスラ (asura) とともに乳海を攪拌したときに現れたとされる象で, インドラの

- 乗り物として知られる。[Dowson 1973: 9] 参照。
- 226) GGN195, 4, 6: 金剛杵を手にする（左手に関する規定はない）。
- 227) パンチエン 106, 3: 青。
- 228) NT₄: phyag gnyis na dun dkar po 'dzin pa/ sbrul gyi zhags pa'o (二臂にはら貝を持つ)。
蛇の索を [持つ]。GGN196, 1, 1: 蛇の索を持つ; プトン 355, 3: ほら貝と蛇の索を持つ;
GDK475, 6: 右手にはら貝, 左手に蛇の索を持つ。
- 229) NT₄: lcags kyu dang shag ti dang dbyug to 'dzin pa'o (鉤と短槍と棍棒を持つ)。
- 230) GGN195, 5, 4: 三鉢のカトヴァーンガ。プトン, GDK は NPY と同じである。
- 231) NT₄ は kapālī に対応する語を欠く。
- 232) GGN は「頭蓋骨と半月……首が青い」の部分を欠く。プトン 354, 6: 二臂で合掌し, 頭
上に置く。
- 233) NT₁₋₃: blugs gzar dang spyi blugs (杓と水瓶); NT₄: glugs bzar gyi spyi blugs (杓の水
瓶); AT₁ blugs gar spyi blugs (杓, 水瓶)。GGN195, 5, 7: 右の二臂に杓と杖を, 左の二臂に
数珠を水瓶を持つ。
- 234) NT₄ ral gri gdengs pa dang ri dags gsod pa'i phyag rgya 'dzin pa'o (剣を振り上げ, 動物
を殺す手つきをする)。
- 235) NS₁ は mr̥ge vāyuh を次行の (i)śapraṇāmāñjalayaḥ の代わりに置く。
- 236) GGN195, 5, 7: 旗を持つ。
- 237) NG: nilotpaldharah は NS₁ 以外の Skt., Tib. いずれのテキストにも含まれない。NS₁
は直前の vāyu の記述がこの部分に混入しており, NG もヴァーユの身色と持物の規定 (nilo
vātāputradharah) との混同と考えられる。NG の脚注17, および訳註205) 参照。
- 238) NT₁₋₃: zhal bzhi ni ser po'o (四面は黄色である); NT₄: zhal bzhi yang ser po'o (四面も
黄色である)。
- 239) NT₄: 'dzin pas thal mo sbyar ba (.....を持ち合掌する)。GGN196, 1, 1: 蓮華と数
珠を持つ。
- 240) GGN は前半の二臂で「合掌する」と述べる。
- 241) NT₄: dung dang 'khor lo 'dzin pas spyi bor thal mo sbyar ba (ほら貝と円盤を持ち, 頭
上で合掌する)。NS₂ は śāṅkha のかわりに khadga (剣) とする。
- 242) NT₄ は kṛtāñjalir に対応する語句を欠く。
- 243) GGN196, 1, 6: 弓と棍棒を持つ。
- 244) GGN196, 1, 7: 三叉戟とカバーラを持ち, 頭上で合掌する。明妃たちの集まりによって囲
まれる。
- 245) GGN196, 1, 8: 少年のような表情。
- 246) NT₁₋₃, AT₁ には「六面」の後に phyag drug pa (六臂) の語句がある。
- 247) パンチエン 107, 4: 頭上で合掌する。
- 248) GDK476, 5: カールティケーヤをのぞき, シャクラ (インドラ) 以下の十一尊は左側に各
自の明妃をともない, 頭上で合掌し, 世尊 (マンジュゴーシャ) に礼拝する姿勢をとる。
- 249) GGN はプラフマーニーからガナパティまでを二十八宿のあとに説く (196, 4, 5 ff.)。母神
については [立川 1984, 1986a, 1986c] 参照。
- 250) パンチエン 107, 4-5 とチャンキャ 16, 1, 4 はルドラーニーとヴァイシュナヴィーの記述の

順が逆である。

- 251) AT₁ は *indrāṇī indravat* に対応する語句を欠く。
- 252) GGN196, 4, 6 : 死体。
- 253) GGN は持物をローヒタ魚とカパーラとするのみで、臂数と合掌については言及しない (196, 4, 6)。ローヒタ魚 (*rohita*) は魚の一種とされるが、詳細は不明。
- 254) AT₁ はチャームンダーの記述の前に *byi ba la tshogs bdag* (鳳の上にガナパティ) とガナパティに関する記述が混入している。
- 255) NG, NS₁₋₃: *savyetarā*; NS₄: *savyetarā 'parābhyaṁ*; AS: *savyetarakarā 'parābhyaṁ*. Tib. は NT₁₋₃ が NS₄ に、 NT₁ が NG, NS₁₋₃ に、 AT₁ が AS にそれぞれ一致する。
- 256) GGN は「残りの手で合掌する」を欠く。
- 257) GGN はプリンギーの尊名のみをあげ、尊容については言及しない (169, 4, 7)。
- 258) プリンギーの臂数は Skt. からは二臂であるのか、四臂であるのか明らかではない。二臂の場合、左右の手で数珠とカマンダルを持ちながら合掌し、四臂の場合は和訳のようになる。NT₁₋₃ は明確に四臂であると述べる。NT₄ は Skt. 同様、臂数が明らかではない。なお、AS は *kṛtāñjliḥ* の前に *dvābhyaṁ* (二臂で) とあり、四臂であることがわかる。AT₁ は AS に一致する。GDK480, 5: 頭上で合掌する。
- 259) 聖紐 (*yajñopavīta*) はウパナヤナ (*upanayana*; 入門式) を終えた再生族が身につける紐である。
- 260) GDK はガナパティの後に、両手に宝の壺をもつ地神 *Pṛthivīdevī* を加える (480, 6-481, 1)。したがって、GDK の場合、全体の尊格数は219尊になる。
- 261) 九星の研究には [MITRA 1965] [PAL and BHATTACHARYYA 1969] [清水 1984] がある。
- 262) GGN196, 2, 3: 象の上に。
- 263) GGN196, 2, 4: 蓮華の上に。
- 264) GGN196, 2, 4: 壺の上に。
- 265) GGN196, 2, 5: 黒。
- 266) NG, NS: *omit śyāmaś*; AS: *śyāmaś*; NT₁₋₃: *ljang gu bya ko ki la'i shing rta la zhon pa ljang gu* (緑色、コーキラ鳥の車に乗り、緑色); NT₄: *ljang khu* (緑色)。いずれの注釈書も身色は緑と規定する。
- 267) GGN196, 2, 6: 弓と杯を持つ。
- 268) GGN196, 2, 6-7: 弓と杯を持つ。
- 269) NT₁₋₃: *btung ba'i snod dang gzhu* (杯と弓)。GGN196, 2, 7: 手に矢、弓、杯、剣を持つ。
- 270) NT₁₋₃: *yab kyi g'yas pa'i phyag mtshan gyi gtso bo* (父の右手の第一の持物); NT₄: *rigs bdag gi phyag mtshan gyi gtso bo* (部族主の第一の持物)。
- 271) GGN およびいずれの注釈書にも「あるいは各自…合掌する」の部分を欠く。ただし、GGN は次のように述べる。「このうちアナンタとクリカはバラモン姓で、身色は赤、アグニの子である。ヴァースキとシャンカパーラはクシャトリヤ姓で身色は黄、シャクラの子である。タクシャカとマハーバドマはヴァイシャ姓で身色は黒、ヴァーユの子である。カルコータカ、パドマはシュードラ姓で身色は白、ヴァルナの子である」(196, 2, 8-3, 2)。またブトンと GDK は身色のみをあげるが、それらは GGN のものと一致する。
- 272) GGN196, 3, 2: プラナンダ (*rab dga'*)。

- 273) AT₁ は vairocana に対応する語を欠く。
- 274) NT₁₋₃: go cha sna tshogs (さまざまな甲冑)。
- 275) GGN 196, 3, 3: 広げた羽はさまざまな色。
- 276) GGN は「ヴィーナをひく」に対応する語を欠く。
- 277) GGN 196, 3, 6-7: 金色。
- 278) NT₁₋₃: bi tsi kuṇḍha li; NT₄: pi tsi kum dha li (ヴィチクンダリン)。GGN 196, 3, 8; パンчен 109, 5, チャンキャ 16, 3, 8: ヴィチクンダリン。
- 279) Skt.: jaḍī は意味不明。Tib. は NT: zam gyi chang bu; AT₁: chang bu。ここでは [DAS 1986: 408] の chang bu の項の説明に従う。
- 280) 二十八宿の身色は注釈書によって相違が多くみられるが、逐一指摘しない。
- 281) NT₄ は婬宿 (aśvin) の訳語として、一般に第三宿昴宿 (kṛttikā) の訳語である smin drug をあてる。そのため、NT₁₋₃, AT₁ と NT₄ のあいだでは二十八宿の訳語の対応がふたつずつずれることになる。
- 282) NT₁₋₃: sto g'yogs g'yo ba dang bcas pa (なびく上衣をまとい); NT₄: sto g'yogs dang smad g'yogs g'yo dang bcas (なびく上衣と下衣をまとい); AT₁: g'yo ba dang bcas pa'i sto g'yogs yong su 'dzin pa (なびく上衣をしっかり持つ)。
- 283) NT₁₋₃, AT₁: rdo rje lcags skyu ma (金剛鉤女)。
- 284) NT₄: nang gi sgo (内の門)。
- 285) 「1. 5 四攝菩薩」参照。なお、プトン 359, 4 と GDK 481, 4-6 は門衛として、ヤマーンタカ Yamāntaka, アパラージタ Aparājita, ハヤグリーバ Hayagrīva, ヴァジュラバイラヴァ Vajrabhairava の四尊を四攝のさらに外に置く。
- 286) NT₄: bcom ldan 'das rnam par snang mdzad chen po'i bdag nyid ni 'jam pa'i dbyangs te (偉大な世尊ヴァイローチャナの本質はマンジュゴーシャであり)。
- 287) 大円鏡智が阿闍梨に、平等性智が宝生に、妙觀察智が阿弥陀に、成所作智が不空成就にそれぞれ対応する。
- 288) NT₁₋₃: rdo rje gzugs ma (金剛色女); NT₄: gzugs rdo rje ma (色金剛女); AT₁: gzugs ma (色女)。
- 289) AS は pūrva を欠く。ただし、AT₁ は shar (東) を含む。
- 290) NG: dvādaśa vaśitādayo を AS: dvādaśāyurvaśitādayo とする。Tib. は NT が AS に一致し、AT は tshe dang dbang ma bcu gnyis (十二の命と自在) とある。
- 291) 心種子とは、それぞれの尊格を象徴する単音節のマントラである。[BHATTACHARYYA 1968a: 433] 参照。
- 292) この箇所は NS₁: a āḥ; NS₂₋₃: aṁ āḥ; AS: a ā; NT₁₋₃: a ā; NT₄: a aḥ; AT₁: oṁ a āḥ と多岐にわたる。
- 293) NG: sarvadharma-gagana- を sarvadharma gagana- と二句に分ける。
- 294) 心マントラは、各尊格固有のマントラである。
- 295) 日本では軍荼梨明王の名で知られる忿怒尊である。[頬富 1985: 102-104] 参照。
- 296) すべての行為に関するマントラとは、さまざまな仏教の実践において各行為が支障なく成就するように唱えられるマントラである。

サンスクリット・テキスト

① 以下にあげたのは『完成せるヨーガの環』第21章「法界語自在マンダラ」のサンスクリット・テキストである。使用したテキストとその略号については和訳の冒頭にあげた略号と凡例を参照。

② サンスクリット写本にはつづり字の誤り（rとl, bとvの交替等）や母音の長短の混乱がしばしばみられるが、煩雑を避けるため校註にはNGを採用しない場合に限り異同を註記するにとどめた。

0

dharmađhātuvāgiśvaraṁḍale 'nantaraṁḍala¹⁾ iva vajrapañjarādi-
bhāvanāvyavasthā/yamāntakādayah krodhāḥ param atra vakṣyamāṇarūpāś
caityam iha nāsti/

1

1. kūṭāgārasya nābhau viśvābjakarṇikāsthitasim̄hopari viśvāmbhojacandre
mañjughoṣo vajraparyaṅkī bālārkamaṇḍalaprabhaḥ suvarṇavarṇa²⁾ indranilā-
grasaccīro³⁾ vajraratnapadmaviśvavajramālāmukuṭopari pañcabuddharatn-
akirīṭi vicitraratnābharaṇāmbarah śringārarasarāśih pītanīlāraktasitamūlasavya-
paścimavāmamukho 'ṣṭabhujo dvābhyaṁ dharmacakramudrāṁ⁴⁾ savyaiḥ
krpāṇabāṇavajrāṇi vāmaiḥ prajñāpāramitāpustakacāpavajraghaṇṭā bibhrāṇah/
2. aṣṭadalasthasim̄hopari padmendumaṇḍaleṣu⁵⁾ prāgādīdikṣu mahosṇīśasitāta-
patratejorāśivijayosṇīṣāḥ/
iśānādīvidikṣu vikiraṇa udgato mahodgato jayaś ca⁶⁾/
ete aṣṭoṇīṣā⁷⁾ vajraparyaṅkiṇo ratnamukuṭāḥ⁸⁾ pītavarnā dvibhujā dakṣinā-
pāṇīnā cakrotkarṣaṇaparā⁹⁾ vāmakarenāvaṣṭavya svāsanāḥ¹⁰⁾/

3. ataḥ pūrvakoṣṭhasya madhye gajarāje 'kṣobhyo nīlaś caturvaktro mūlāsyam
nīlam sakrodhaśringāram savyam ūbhram vyāttam¹¹⁾ raudram paścimam¹²⁾
pītam vīram vāmam raktam damṣṭrākarālam aṣṭabhujo dakṣinaiḥ khaḍgavajra-
bāṇāṇkuśabhrā vāmais tarjanīghaṇṭācāpapāśadharah¹³⁾ vajrasattvavajrarājavaj-
rarāgavajrasādhubhiḥ parivṛtaḥ/

dakṣinakoṣṭhasya madhye 'śvarāje ratnasambhavaḥ pitah pitakṛṣṇaśuklara-
ktacaturmukho 'ṣṭabhujaḥ savyair vajrakhaḍgabāṇāṇkuśān vāmaiś cintāmaṇi-
dhvajam vajraghaṇṭām pāśam cāpam ca dadhānah vajraratnavajrasūryavajra-
ketuvajrahāsyaiḥ parivṛtaḥ/

paścimakoṣṭhasya madhye mayūre 'mitābho rakto¹⁴⁾ raktakṛṣṇaśuklapīta-

caturvaktro¹⁵⁾ 'ṣṭabhujaḥ savyair vajrabāṇakhadgāṇkuśān vāmaiḥ padmacāpa-pāśaghaṇṭā¹⁶⁾ bibhrāṇaḥ vajradharmavajratikṣṇavajrahetuvajrabhāṣaiḥ^{17),18)} parivṛtaḥ/

uttarakoṣṭhasya madhye garude 'moghasiddhiḥ śyāmaḥ caturmukhaḥ mūlam śyāmaṁ daṇṭrākarālām dakṣinam pītam śāntam paścimam raktam saśringāram vāmaṁ sitam śāntam aṣṭabhujo dakṣinaiḥ khaḍgavajrabāṇaṇkuśabhṛd vāmais tarjanīghaṇṭācāpāśadharaḥ vajrakarmavajrarakṣavajrayakṣava-jrasandhiḥbhiḥ parivṛtaḥ/

akṣobhyādayas tathāgatāḥ svavāhanopari viśvapadmasūryeṣu vajraparyā-nkaniṣaṇṇā vicitraratnābharaṇāmbarā ratnamukuṭināḥ/ vajrasattvādayas tu ṣoḍaśeśānādikoṇasthaviśvapadmacandreṣu vajradhātumaṇḍaloktasvarūpāḥ/ atrāpi dikṣu sthitā ity api pakṣo 'sti/

4. aiśānādikoṇasthaviśvābjendusu sattvaparyāṇkiṇyo locanāmāmakipāṇḍa-rātārā yathākramam mañjughoṣākṣobhyāmitābhāmoghasiddhisannibhāḥ¹⁹⁾/

5. pūrvadvāre vajrāṇkuśo raktagauro vajrāṇkuśapāśabhr̄d²⁰⁾ āliḍhasthāḥ/ dakṣine vajrapāśah pīto vajrapāśabhr̄t pratyāliḍhasthāḥ/ paścime vajrasphoṭo raktaḥ vajraśr̄ṇkhalaḥbhr̄d²¹⁾ bhujadvayo vaiśākhapada-sthāḥ/

uttaradvāre vajrāveśaḥ śvāmo vajrabandhena karadvayagrīhitavajraghaṇṭo maṇḍalapadasthāḥ/ ete catvāro viśvābjasūryeṣu sthitā dvibhujās²²⁾ trinetraikavadanāḥ piṅgordhvakeśaśmaśravo 'ṣṭanāgābharaṇāḥ/

2

1. ato garbhamaṇḍalāt dvitīyamaṇḍale pūrvasyāṁ diśy aiśānyāḥ²³⁾ prabhṛti pradakṣinam yathākramam dvādaśabhūmayo dvibhujā dakṣine vajradhāriṇyo vāmena svasvacihnadharāḥ/ tatrādhimukticaryābhūmiḥ padmaraktā raktapadmadharā/ pramuditā raktā cintāmaṇibhr̄t/ vimalā śuklā śuklajalajadharā²⁴⁾/ prabhākari raktā viśvapadmasthasūryamaṇḍaladharā/ arciṣmati marakatavarṇā nīlotpaladharā/ sudurjayā pītotsaṅgasthottānapāṇinā²⁵⁾ marakatamaṇidharā/ abhimukhi hemavarṇā padmopari prajñāpāramitāpustakadharā/ dūraṅgamā gaganaśyāmā viśvapadmopari viśvavajradharā/ acalā śaraccandrābhā candrastharaktapañcaśūkavajrāṇkitapankajasya²⁶⁾ nālam sagarvam bibhratī/ sādhumatī sitā khaḍgāṇkitotpaladharā/

dharmameghā pītā²⁷⁾ dharmameghaparikalitaprajñāpāramitāpustakadharā/
samantaprabhā madhyāhnādityavarṇā padmopari samyaksambodhisūcakāmi-
tābhuddhabimbadharā/

2. dakṣiṇasyāṁ dvādaśapāramitā dvibhujāḥ savyena cintāmaṇibhṛto²⁸⁾
vāmena svavacihnadharāḥ/ prajñāpāramitā tv adhikakaradvayā/
tatra ratnapadmapāramitā²⁹⁾ raktā padmastacandramaṇḍaladharā/
dānapāramitā sitaraktavarṇā nānādhānyamañjarihastā/
śilapāramitā śvetā sapallavāśokakusumastavakakarā³⁰⁾/
ksāntipāramitā pītā sitābjadharā/
vīryapāramitā marakatavarṇā nīlotpaladharā/
dhyānapāramitā gaganaśyāmā sitābjahastā/
prajñāpāramitā kamaniyakanakakāntiḥ padmastaprajñāpāramitāpustaka-
dharā karadvayena dhṛtadarmacakramudrā/
upāyapāramitā priyaṅguśyāmā pītapadmasthavajrabhṛt/
praṇidhānapāramitā nīlotpalavarṇā nīlotpalasthakhaṇḍgadharā/
balapāramitā raktā prajñāpāramitāpustakadharā/
jñānapāramitā śubhrā nānāratnaphalāṇkṛtabodhivṛkṣalatādharā³¹⁾/
vajrakarmapāramitā viśvavarṇā nīlotpalasthaviśvavajradharā/

3. paścimāyāṁ dvādaśavaśitā dvibhujā dakṣiṇenāmbhojabhṛto vāmena
sagarvāṁ svavacihnadharāḥ/
tatrāyurvaśitā sitaraktavarṇā padmarāgamaṇiṣthasamādhimudrāmitāyurbu-
ddhabinbadharā/
cittavaśitā sitā raktapañcaśūkavajradharā³²⁾/
pariṣkāravaśitā pītā cintāmaṇidhvajadharā/
karmavaśitā haritā viśvavajradharā/
upapattivaśitā viśvavarṇā vividhavarṇājātilatāhastā/
ṛddhivaśitā nabhaḥsyāmā padmasthanasūryacandramaṇḍaladharā/
adhimuktivaśitā mṛṇālagaurā priyaṅgukusumamañjarīdharā/
praṇidhānavavaśitā pītā nīlotpalahastā/
jñānavavaśitā nīlā³³⁾ nīlotpalasthakhaṇḍgadharā/
dharmavaśitā sitaraktavarṇā³⁴⁾ padmashabhadraghaṭahastā/
tathatā śvetā śubhrāmbhojabhṛd³⁵⁾ dakṣiṇapāṇir vāmena vajraraatnamañjarī-
dharā³⁶⁾/
buddhabodhiprabhā kanakābhā savyena pītapadmastapañcasūcikavajradharā
vāmena cintāmaṇidhvajopari cakradharā/

4. uttarasyāṁ dvādaśadhāriṇyo dvibhujāḥ savyena viśvavajram bibhrāṇā
vāmena sagarvāṁ svavacihnbhṛtaḥ/
tatra vasumati³⁷⁾ pītā dhānyamañjarīdharā/

ratnolkā raktā cintāmaṇidhvajadharā/
 uṣṇīśavijayā sitā candrakāntamaṇikalaśahastā/
 māričī³⁸⁾ raktagauravarṇā sasūtrasūcidharā/
 parṇaśabarī śyāmā mayūrapicchadharā/
 jāṅgulī suklā viśapuśpamaṇījarīdhara/
 anantamukhā³⁹⁾ priyaṅguśyāmā raktābjasthākṣayamahānidhikalaśahastā/
 cundā suklā akṣasūtrāvalambitakamaṇḍaludhara/
 prajñāvardhanī sitā nilotpalasthakhaḍgadharā⁴⁰⁾/
 sarvakarmāvaraṇaviśodhanī haritā triśūkavajrāṇikasitaraktakamaladharā^{41),42)}/
 akṣayajñānakaraṇḍā raktā ratnakaraṇḍadharā/
 sarvabuddhadharmakoṣaṭī pītā padmasthānāratnapetakadharā/
 5. pūrvadvāre dharmapratisamvit sitaraktā vajrāṇkuśapāśabhr̄d bhujadvayā/
 dakṣine 'rthapratisamvit marakatavarṇā savyetarabhujābhyaṁ ratnapāśabhr̄/
 paścime niruktipratisamvit raktā antadvaye padmāṇkaśrīkhalābhṛd⁴³⁾ bhujā-
 dvayā/
 uttare pratibhānapratisamvit marakataśyāmā triśūkavajrāṇkitaghaṇṭāvy-
 grakaradvayā⁴⁴⁾/
 6. āgneyakoṇe lāsyā pītā sagarvam̄ karābhyaṁ vajradvayaṁ bibhratī/
 nairṛtye mālā raktagauravarṇā ratnamālābhṛd bhujadvayā/
 vāyavye gitā raktā hastabhyaṁ vīṇāṁ vādayantī/
 aiśānyāṁ nṛtyā śyāmā dhṛtatriśūkavajraghaṇṭā⁴⁵⁾ nṛtyad bhujayugmā/
 7. eta adhimukticaryābhūmiprabhṛtayo devyāḥ sarvā vicitraratnābharaṇa-
 ambarā ratnamukuṭinyāḥ smerāsyāḥ⁴⁶⁾ śrīṅgāriṇyo viśvapadmendumaṇḍale
 sattvaparyāṇkanisaṇṇāḥ/
 dvārapālāḥ param̄ sūryeṣu⁴⁷⁾/ tā api candrasthā ity anye/

3

1. tṛṭiyamaṇḍale aiśānyāḥ prabhṛti⁴⁸⁾ bodhisattvāḥ/
 tatra pūrvasyām̄ paṭṭikāyām̄ samantabhadraḥ pītaḥ savyena varado vāmena
 utpalasthakhaḍgadharāḥ/
 akṣayamatih pītaḥ savyena khaḍgam̄ vāmenābhayena kamalam̄⁴⁹⁾ bibhartti/
 kṣitigarbhaḥ pīto dakṣinena kṛtabhūsparśo vāmābjasthakalpadrumadharāḥ⁵⁰⁾/
 ākāśagarbhaḥ śyāmaḥ savyena sarvaratnavarsi vāmena cintāmaṇibhṛt/
 dakṣiṇasyām̄ gaganagaṇjaḥ pītaḥ savyena cintāmaṇibhṛd vāmena bhadra-
 ghaṭāvalambitakalpavṛkṣam dadhānah/
 ratnapāṇih śyāmo dakṣiṇapāṇinā ratnam̄ vāmenābjasthacandramāṇḍalam
 bibhrānah/
 sāgaramatiḥ sitaḥ savyena śāṅkham̄ vāmena vajrakhaḍgam̄ dadhānah/

vajragarbhō nīlotpaladalavarṇo dakṣinēna vajram vāmena daśabhūmaka⁵¹⁾
pustakadharah/⁵²⁾

paścimāyām avalokiteśvaraḥ śubhraḥ savyena varado vāmena saroja-
dharah/⁵³⁾

mahāsthāmaprāptah pītaḥ savyena khaḍgam vāmena padmam dadhānah/
candraprabhaḥ śubhraḥ savyena vajracakram vāmena padmasthacandrama-
ṇḍalam dhatte/⁵⁴⁾

jālinīprabhaḥ sitaraktaḥ savyenāśīm vāmenābjasthasūryam/⁵⁵⁾

uttarasyām amitaprabhaḥ sitaḥ savyena viśvapadmam vāmenābjasta-
kalaśam bibhrāṇah/⁵⁶⁾

pratibhānakūṭaḥ pīto dakṣinēna cchoṭikām dadat⁵⁷⁾ vāmena padmasthakṛpā-
ṇam dhatte/⁵⁸⁾

sarvaśokatamonirghātamatih kuṇkumavarṇaḥ savyena pañcaśūkakuliśam⁵⁹⁾
vāmena śaktim dadhānah/⁶⁰⁾

sarvanivaraṇaviśkambhī nīlaḥ kṛpāṇabhr̥t savyapāṇiḥ vāmena viśvavajrāṇika-
patākādharah/⁶¹⁾

śoḍāśāpy ete viśvāmbhojacandreṣu sattvaparyāṇkiṇo ratnamukuṭino
nānāratnavastramaṇḍitā dvibhujaikamukhāḥ/⁶²⁾

2. pūrvadvāre mahiṣe yamāntakaḥ krṣṇas tundi⁵⁴⁾ ṣaṇmukhaḥ ṣaṇbhujah⁵⁵⁾
ṣaḍcaraṇah⁵⁶⁾ savyair⁵⁷⁾ aṅkuśakṛpāṇabāṇān vāmais tarjanipāśam ghaṇṭām
cāpam ca dadhānah/⁵⁸⁾ mukhacaraṇānām višeṣaḥ pūrvavat/⁵⁹⁾

dakṣine prajñāntakaḥ pītaḥ pītacaturmukho⁵⁸⁾ mūlamukham saśringāram
savyam vyāttam⁵⁹⁾ paścimam mahāraudram vāmam śāntam/ atha vaitāni⁶⁰⁾
yathākramam pītanilaraktaharitāni/ aṣṭabhujo 'yam savyaiḥ pāśavajrakhadga-
bāṇān vāmaiḥ hr̥dyāṇkuśam vajraghanṭām śaktim cāpam ca dadhānah/⁶¹⁾

paścime padmāntako rakto raktacaturvaktraḥ⁶¹⁾ śringāraraudrahāsyā-
śāntarasānvitāni mūlasavyaprsthavāmamukhāni/ atha vaitāni⁶²⁾ raktakṛṣṇa-
pītasitāni/ aṣṭabhujo 'sau dvābhyām vajrasphoṭam⁶³⁾ savyair vajrakhadgabāṇān
vāmais ghaṇṭātarjanipāśacāpānvitah/⁶⁴⁾

ete trayo lalitākṣepēṇa sthitāḥ/

uttare vighnāntako nīlo nīlacaturmukhaḥ⁶⁴⁾/ atha vaitāni⁶⁵⁾ nīlapītar-
ktaharitāni/ aṣṭabhujo 'sau dvābhyām vajrabandhena ghaṇṭām⁶⁶⁾ dakṣinaiḥ
kṛpāṇabāṇāṇkuśān vāmais tarjanipāśam cāpam ghaṇṭām ca dadhāno vināya-
kam pratyālidhenākramya sthitah/⁶⁷⁾

iśānakoṇe trailokyavijayo nīlo nīlacaturmukhaḥ⁶⁷⁾ mūlam sakrodha-
śringāram savyam raudram pṛṣṭham vīrarasaṁ vāmam bībhatsam/ atha vaitā-
ni⁶⁸⁾ nīlapītaraktasitāni aṣṭabhujo dvābhyām vajraghaṇṭānvitābhyām hr̥di va-
jrahūṃkāramudrām savyaiḥ khaḍgāṇkuśabāṇān vāmaiḥ kuliśapāśacāpān

gṛhnānah⁶⁹⁾ pratyāliḍhena vāmapādākrāntamahēśvaramastako dakṣinacara-nenāvaṣṭabdhomāstanaḥ/

agnau vajrajvālānalārkaḥ kṛṣṇaḥ śrīngāravīrabibhatsakarunarasānvita-kṛṣṇacaturmukhaḥ⁷⁰⁾/ atha vaitāni⁷¹⁾ nīlasitapītaraktāni⁷²⁾/ aṣṭabhujo 'sau savyair vajrāsiśaracakrabhṛd vāmair ghaṇṭāṁ pāśāṁ cāpaṁ khaṭvāṅgāsakta-patākāṁ ca bibhartti⁷³⁾ sapatnīkāṁ viṣṇum āliḍhenākramya sthitāḥ/

nairṛtye herukavajro nīlo nīlacaturvadano⁷⁴⁾ mūlam raudram savyam pramohamohitaṁ⁷⁵⁾ pr̄ṣṭham bhakṣaṇodyatam vāmam saśrīngāram/ atha vaitāni⁷⁶⁾ nīlāraktaharitaśuklāni/ aṣṭabhujo 'yam dakṣinaiḥ pañcasūkavajram⁷⁷⁾ bāṇam raktaपūrṇakāpālaṁ vāmair hr̄di kamalakalikāṁ dhanuh saghaṇṭāpatā-kakhaṭvāṅgaṁ dvābhīyāṁ mahābhairavacarma vātapaṭam⁷⁸⁾ iva dadhānah sapatnīkāṁ brahmāṇam pratyāliḍhenākramya sthitāḥ/

vāyavye paramāśvah śyāmaḥ śyāmacaturvaktraḥ⁷⁹⁾ mūlam sakrodha-śrīngāram savyam raudram vāmam brahmamukham/ atha vaitāni⁸⁰⁾ harita-nīlaśuklāni mūrdhnyaśvamukhaṁ haritam/ aṣṭabhujo 'sau saviśvavajratripa-tākānvitasavyenottīsthābhīnayam⁸¹⁾ dvitīyena tripatākābhīnayam dvābhīyām khaḍgabāṇau/ vāmena keṭakahastena⁸²⁾ viśvābjam tribhiḥ śaktidaṇḍacāpān bibhrāṇaḥ/ āliḍhapratyāliḍhābhīyāṁ catuścaraṇaḥ/ dakṣinenaikenendrāṇīṁ śriyam ca dvitīyena ratim prītim ca vāmenaikenendramadhukaram⁸³⁾ ca dvitīyena jayakaram vasantam cāvaṣṭabhya⁸⁴⁾ sthitāḥ/

cakreśasyordhvakoṇe uṣṇīśacakravartī pīṭaḥ caturmukhaḥ pīṭanīlarakta-sitacaturmukho⁸⁵⁾ vāṣṭabhujaḥ savyaiś cakrāṇkuśakṛpāṇabāṇān vāmair ghaṇṭāpāśākṣamālādhanūṁsi dadhāno lalitākṣepeṇa sthitāḥ/

adhaṣṭāt sumbharājaḥ kṛṣṇo raudraśāntahāsyāśrīngārarasānvitakṛṣṇaca-turvaktraḥ⁸⁶⁾ kṛṣṇasitaraktapītacaturmukho vāṣṭabhujaḥ⁸⁷⁾ savyair vajrāṇku-śāsiśārān vāmair ghaṇṭāpāśāsūlakārmukāni bibhrāṇaḥ pratyāliḍhena sthitāḥ/

ete daśakrodhāḥ viśvāmbhojasūryasthāḥ pratimukhaṁ ratkatrinetrāḥ kṛtabhrūbhāṅgā vyāghracarmāmbarottariyāḥ kapālamālāmukutā dīptab-dhordhvapiṅgalakeśāḥ piṅgaśmaśravo 'ṣṭabhiḥ phaṇiśair bhīṣṇāḥ/

3. tṛtīyamaṇḍalasyaiva⁸⁸⁾ koṇābhīyantare trailokyavijayādikrodhebhyāś catur-bhyo bāhyarekhāyā āgneyādicatuḥkoṇasūtrāṇām⁸⁹⁾ savyapārśveṣu puṣpādyāḥ vāmapārśveṣu bāhyasthāne⁹⁰⁾ vajrarūpādyāḥ/

tatra puṣpā pīṭā puṣpapuṭahastā/

dhūpā kṛṣṇā dhūpakaṭacchūhastā/

dīpā raktā ratnapradīpayaṣṭīhastā/

gandhā śyāmā gandhaśāṇkhahastā/

vajrarūpā pīṭā darpaṇapāṇīḥ/

vajraśabdā śyāmā viṇāhastā/

vajrarasā⁹¹⁾ raktā gandhabhājanabhujaḥ/

vajrasparśā viśvavarnā viśvavastrahastā⁹²⁾/
aṣṭāv ete dvibhujā ratnamukuṭinyo vicitravastraratnamañḍitāḥ padmendusu
sattvaparyāñkiṇyaḥ/

4

1. caturthavajrakulamañḍale⁹³⁾ aindryāṁ diśi śubhairāvatārūḍha⁹⁴⁾ indraḥ pīto vajram stanam ca dadhānaḥ/
yāmyāṁ mahiṣe yamaḥ kṛṣṇo dañḍaśūlabhṛt⁹⁵⁾/
vārunyāṁ⁹⁶⁾ makare varuṇaḥ śvetāḥ saptaphaṇo nāgapāśaśāṅkhabhṛt/
kauveryyāṁ nare kuberaḥ pīto⁹⁷⁾ 'ṅkuśagadādharaḥ/
aiśanyāṁ vr̥ṣabhārūḍha iśānaḥ sitaḥ triśūlakapālapāṇiḥ kapālijaṭārdhacandra-
dharaḥ⁹⁸⁾ sarpayajñopavītī nilakanṭhaḥ/
āgneyyāṁ chāge 'gniḥ raktaḥ sruvakamañḍaludharaḥ/
nairṛtyāṁ rākṣasādhipo nairṛtiḥ nīlah śavārūḍhaḥ⁹⁹⁾ khaḍgakheṭakabhrta-
karaḥ¹⁰⁰⁾/
vāyavyāṁ mṛge vāyur nīlo vātapuṭadharmaḥ/
ete 'ṣṭau caturbhujāḥ savyena prathamam cihnam vāmena kroḍitasvābha-
patnikena¹⁰¹⁾ dvitiyam bibhrāṇā dvābhyāṁ śirasi kṛtacakreśapraṇāmāñjala-
yah¹⁰²⁾/
2. iśānasya samīpe bahir aiśanyādiśaḥ¹⁰³⁾ prabhṛti krameṇa brahmādayaḥ/
tatra hamse brahmā pītaś caturmukhaś caturbhujō 'kṣasūtrābjabhrt savyetarā-
bhyāṁ kṛtāñjalir dañḍakamañḍaludharaḥ/
garude viṣṇuh kṛṣṇaś¹⁰⁴⁾ caturbhujāś cakraśāṅkhabhṛt savyavāmābhyāṁ
mūrdhni kṛtāñjalir gadāśārṅgadhanurdharaḥ¹⁰⁵⁾/
vr̥ṣabhe maheśvaraḥ sitaḥ śāśikanakāñkitajaṭājūṭaś¹⁰⁶⁾ caturbhujāḥ śirasi
kṛtāñjalis triśūlakapālabhṛt/
mayure kārttikeyo raktaḥ ṣaṇmukhaḥ savyābhyāṁ śaktim vajram ca vāmābh-
yāṁ kukkuṭaghaṇṭāṁ¹⁰⁷⁾ ca dadhāno dvābhyāṁ kṛtāñjalih/
ete 'pi pūrvavad āliṅgasvābhapatnikāḥ/
3. brahmāṇī tu brahmavat/
rudrāṇī rudravat/
vaiśṇavī viṣṇuvat/
kaumārī kārttikeyavat/
indrāṇī indravat/
vārāhī kṛṣṇā pecakārūḍhā caturbhujā savyavāmābhyāṁ rohitamatsyakapāla-
dharā dvābhyāṁ kṛtāñjalih/
pretopari cāmuṇḍā raktā caturbhujā kartrikapālabhṛt savyetarā kṛtāñjalih¹⁰⁸⁾/
bhṛngī kṛṣṇaḥ kṛṣṇa¹⁰⁹⁾ 'kṣasūtrakamañḍaludharaḥ kṛtāñjalih/
4. mūṣake gaṇapatih sitaḥ karivaktraḥ sarpayajñopavītī caturbhujāḥ savyā-

bhyām̄ triśūlaladḍukau vāmābhyaṁ parśumūlakē¹¹⁰⁾ dadhānah/
 mahākālah kṛṣṇas triśūlakapālabhṛt/
 nandikeśvaraḥ kṛṣṇo murajārūḍho murajavādanaparaḥ/
 5. saptaturagarathe ādityo ratko dakṣināhastena vāmena ca padmasthasūrya-
 maṇḍaladharaḥ/
 hamse candraḥ śubhraḥ savyahastena vāmena ca kumudasthachandramaṇḍala-
 bhṛt/
 chāgale maṅgalo raktaḥ savyena kaṭṭāram̄ vāmena mānuṣamuṇḍam̄ bhakṣa-
 ḥābhīnayena dadhānah/
 padme budhaḥ pītaḥ śaradhanurdharah/
 bheke kapāle vā bṛhaspatir gauro 'kṣasūtrakamaṇḍaludharah/
 śukraḥ śuklaḥ kamalastho 'kṣasūtrakamaṇḍalubhṛt/
 kacchape śanaiścaraḥ kṛṣṇo daṇḍadharah
 rāhū raktakṛṣṇaḥ sūryacandrabhṛtsavyetarakarah/
 ketuḥ kṛṣṇaḥ khaḍgaṇāgapāśadharah/
 6. kuñjare balabhadraḥ sitaḥ khaḍgalāṅgaladharah/
 kokilarathe jayakaraś caturbhujah savyābhyaṁ puṣpamālām̄ bāṇam̄ ca
 vāmābhyaṁ caśakadhanuśī dadhānah/
 śukasyandane madhukaro gauraś caturbhujah savyābhyaṁ makaradvajaśa-
 rau¹¹¹⁾ vāmābhyaṁ caśakacāpau bibhartti/
 plavaṅge vasantaḥ sitaś caturbhujah savyābhyaṁ bāṇakṛpāṇabhr̄d vāmābhyaṁ¹¹²⁾
 dhanuścaśakadharah/
 7. anantavāsukitakṣakakarkkoṭakapadmamahāpadmaśāṅkhapālakulikāḥ sa-
 ptaphaṇāḥ¹¹³⁾ kṛtāñjalayaḥ svavapituḥ pradhānacihnatāñjalayo vā/
 8. vēmacitribaliprahālādavairocanādayo mahāsurendrāḥ kṛṣṇāḥ¹¹⁴⁾ sanna-
 ddhabaddhakavacāḥ khaḍgakhetakādinānāpraharaṇavyagrakarāḥ¹¹⁵⁾/
 9. garuḍendraḥ kṛtāñjaliḥ prasāritapakṣo vā yāvaj jānu śubhras tadūrdhvam̄
 nābhiṁ yāvat pītas tadūrdhvam̄ kaṇṭham̄ yāvad raktas tadūrdhvam̄ mastakam̄
 yāvat kṛṣṇaḥ/
 drumakinnararājendro¹¹⁶⁾ raktagauro viṇāvādanaparaḥ/
 pañcaśikho gandharvarājendraḥ pīto viṇām̄ vādayati/
 sarvārthasiddho vidyādharaṇājendro gauraḥ kusumamālāhastaḥ/
 10. pūrṇabhadro nilaḥ/ māṇibhadraḥ pītaḥ/ dhanado raktaḥ/ vaiśravaṇaḥ
 pītaḥ/ civikuṇḍalī raktaḥ/ kelimālī śyāmaḥ/ sukhendraḥ pītaḥ/ calendraḥ pītaḥ/
 pūrṇabhadrādayo yakṣādhipā bijapūraphalanakulabhr̄t savyetarakarāḥ/
 11. hārītī pītā jaḍīdvayadhāriṇī saputrā/
 12. aśvinī sitā/ bharaṇī haritā/ kṛttikā śyāmā/ rohiṇī raktagaurā/ mṛgaśirā
 kṛṣṇā/ ārdrā pītā/ punarvasuḥ pītā/ puṣyā śyāmā/ āśleśā śuklā/ maghā pītā/

pūrvaphālgunī priyaṅguśyāmā/ uttaraphālguni haritā/ hastā sitā/ citrā haritā/
svātī pītā/ viśākhā kṛṣṇā/ anurādhā śyāmā/ jyeṣṭhā pītā/ mūlā pītā/ pūrvāśādhā
kṛṣṇā/ uttarāśādhā pāñḍuvarṇā¹¹⁶⁾/ śravaṇā sitagaurā/ dhaniṣṭhā kṛṣṇā/ śata-
bhiṣā pītā/ pūrvabhādrapadā haritā/ uttarabhādrapadā pītā/ revatī śuklagaurā/
abhijih¹¹⁷⁾ śyāmā/
aśvinyādayo devyaś calanakañcukiparidhānāḥ^{118),119)} kṛtāñjalayaḥ/
anye 'pi devā vimānasthā vijñeyāḥ/
13. etāḥ śakrādyā devatāḥ padmasthāḥ pratyekam aparimitaparivārāś ca
yathāyogaṁ vicitravastraratnādyalaṅkṛtā bhagavantam maṇḍaleśam nama-
syanto jojotkaramukharitadiñmukhāḥ/
14. pūrvādīdvāreṣu vajrāñkuśādayo dvārapālā yathā garbhamaṇḍale/

5

iha bhagavān mahāvairocanātmā mañjughoṣaḥ suviśuddhadharmadhātu-
jñānasvabhāvaḥ svābhavajrasattvena mudritāḥ/
ādarśādijñānasvabhāvākṣobhyāditathāgatāś catvāra uṣṇiṣā locanā ca
mañjughoṣeṇa/
vajrasattvādayaś catvāro māmakivajrāñkuśadvādaśabhuṣayo¹²⁰⁾ dharma-
pratisaṁvit lāsyā samantabhadrādayaś catvāro daśakrodhaḥ puṣparūpāpūrva-
diksthitadevatāś¹²¹⁾ cākṣobhyeṇa/
vajraratnādayaś catvāro vajrapāśo dvādaśapāramitārtha-pratisaṁvit mālā-
gaganagañjādayaś catvāro dhūpā śabdā dakṣiṇadiggata-devatāś ca ratna-
mbhavena/
vajradharmādayaś catvāraḥ pāñḍarā vajrasphoṭā dvādaśāyurvaśitāda-
yo¹²²⁾ niruktipratisaṁvitgītā 'valokitādayaś catvāro dīpā rasā paścimadiga-
vasthitadevatāś cāmitābhena/
vajrakarmādayaś catvāro vajrāveśo dvādaśadhāriṇyaḥ pratibhānasamvit
nṛtyā 'mitaprabhādayaś catvāro gandhā sparśottaradiggatāś ca amoghaśiddhinā
mudritāḥ/

6

mañjughoṣasya hṛdbijam mūḥ/ a āḥ¹²³⁾ sarvatathāgataḥṛdaya hara hara
om hūṁ hṛiḥ bhagavan jñānamūrtti vāgiśvara mahāvāca sarvadharma gagana-
amala supariśuddhadharmadhātujñānaghārbha āḥ iti hṛdayamantraḥ/ om
amṛtakuṇḍali vigñāntaka hūṁ iti amṛtakuṇḍalimantraḥ sārvakarmikāḥ/
iti dharmadhātuvāgiśvara maṇḍalam//

テキスト校註

- 1) NG -maṇḍala; NS₁ -maṇḍale; NS₂ -maṇḍale anantramaṇḍala; NS₃₋₄ -maṇḍale 'rananta-mala; AS₁ -maṇḍale 'nantaramaṇḍala.
- 2) NG suvarṇavarṇaḥ; NS₁ śuvarṇa; NS₂ suvarṇasuvarṇa.
- 3) NG nilābha-.
- 4) NG -mudraḥ; NS₁ -mudrāḥ.
- 5) NG padmacandra-; NS₃ padme candra-
- 6) NG vikīraṇodgatamahodgatojaś ca; NS₁ vikīraṇa udgato mahogato jayayaḥ; NS₃ vikīraṇa mahodgato udgatojaś ca.
- 7) NG -uṣṇīṣāḥ; NS₁ -uṣṇīṣo; AS₂ -uṣṇīṣa.
- 8) NG -mukūṭyaḥ; NS₁₋₂ -mukuṭo; NS₃₋₄ -mukuṭīḥ.
- 9) NG cakrākarṣaṇa-; NS₁ cakokaṣaṇa-.
- 10) NG avaṣṭabdhāsanāḥ; NS₁ avaṣṭabhyaṁ sanā; NS₂ avaṣṭarvva svāsanā; NS₄ avaṣṭabhyassvasvāsanā; AS₁ avaṣṭac ca svāsanah; AS₂ avaṣṭac ca ddhasvāsanāḥ (?).
- 11) NG, NS₁₋₂ vyāvṛttam.
- 12) NG paścime.
- 13) NG, NS₁₋₂ -pāśacāpa-.
- 14) NG, NS_{1,3} omit raktō.
- 15) NG -vastro.
- 16) NG -ghaṇṭāḥ; AS₁ ghamṭa.
- 17) NG vajredharma-.
- 18) NG -tikṣṇahetu-
- 19) NG omits -ābha-.
- 20) NG omits -pāśa-.
- 21) NG -śrṅkhala-.
- 22) NG -bhujāḥ; NS₃ -bhujā.
- 23) NG, AS₁ diśi aiśānyāḥ; NS₁ diśaiśānyāḥ; NS₂ diśy aiśānāḥ; NS₃ diśi aiśyamā; NS₄ diśy aiśānyāṁ.
- 24) NG śuklakamala-; NS₁ jalaja-; NS₃ śuklajala-; NS₄ śubja-; AS₁ śvetābjā-.
- 25) NG, NS₁ pītā utsaṅga-.
- 26) NG -pañcasūcika-; NS₄ -raktapañcaka-.
- 27) NG omits pītā.
- 28) NG, NS₁ cintāmaṇidhvajam; NS₄ omits cintāmaṇi.
- 29) NG ratnapāramitā.
- 30) NG sapallavagaurakusumacakrakarā; NS₁ parravaḥ/ śakakuñjamatavakarā.
- 31) NG, NS₁ omit -latā-.
- 32) NG, NS₁ -sūcika-; NS₂ -sūka-.
- 33) NG, NS₃ sitanīlā; NS₁ omits nīlā.
- 34) NG sitā raktavarṇa-; NS₁ raktavarṇa-; AS₁ raktā; AS₂ sitarakta.
- 35) NG, NS₁ śvetaśubhra-.
- 36) NG, AS₁₋₂ omit vajra.
- 37) NG sumati; NS₁ vasumati.
- 38) NG māri; NS₁ marati; NS₂ marici; AS₂ mārīci.
- 39) NG, NS₃₋₄ -mukhī.
- 40) NG, NS₁ omit -stha-.
- 41) NG -sūcika-.
- 42) NG, NS₁ omit rakta.
- 43) NG baddhapadmānta-; NS₁ antadvaya padmāka-; NS₄ duṣṭadvaye padmāṅka-; AS₁

法界語自在マンダラの神々

- anantadvaye padmāñki-; AS₂ antadvayena padmāñka-.
- 44) NG -sūcika-.
- 45) NG -trisūcikavajraghaṇṭā; NS₁ triśūkavajraghaṇṭabhya; NS₂ -trisūkavajraghaṇṭā.
- 46) NG apsarāsyāḥ; NS₁ omits smerāsyāḥ; NS₃ śmarāsyāḥ; NS₄ sperāsyāḥ; AS₁ ime lāsyāḥ; AS₂ smelāsyāḥ.
- 47) NG dvālapālyo 'parasūryeṣu; NS₁ parasūryeṣu; NS₂ dvārapāre 'parasūryeṣu.
- 48) NG aiśānyādiprabhṛti; NS₁ aiśānyā prabhṛti; NS₄ aiśānya prabhṛti.
- 49) NG abhayakamalam NS₁₋₂ kamaṇḍalu; AS₁₋₂ abhayena padmaṇam.
- 50) NG vāmena; NS₁ vāme; NS₂ mena.
- 51) NG -bhūmika-; NS₁ -bhū-; NS₂ -bhūrkame.
- 52) NG, NS₁₋₂ omit dadat.
- 53) NG -sūcika-.
- 54) NG tundilāḥ; NS₁ omits tundi; NS₂ tudi.
- 55) NG omits ṣaṇbhujāḥ.
- 56) NS₁ omits ṣaḍcaranāḥ.
- 57) NG savyena.
- 58) NG, NS₁₋₂, AS₁₋₂ omit pīta-.
- 59) NG savyāṁ serṣāṁ; NS₁₋₂ savyāntāṁ;
- 60) NG, NS₁₋₂ ca.
- 61) NG, NS₁₋₂ omit rakta-.
- 62) NG, NS₁₋₂ ca.
- 63) NG omits dvābhyaṁ vajrasphoṭam; NS₁ dvābhyaṁ vajrasphoṭa; NS₂ dvābhyaṁ vajrasphoṭam; AS₁₋₂ dvābhyaṁ vajrasphoṭāḥ.
- 64) NG omits nīla-; NG₁₋₂ omit nīlo.
- 65) NG, NS₁₋₂ ca.
- 66) NG vajraghaṇṭe.
- 67) NG omits nīla-; NG₁₋₂ omit nīlo.
- 68) NG, NS₁₋₂ ca.
- 69) NG gr̥hṇan.
- 70) NG omits kr̥ṣṇa-.
- 71) NG, NS₁₋₂ ca.
- 72) NG, NS₁₋₂ -pītasita-.
- 73) NG bibharti; NS₁₋₂ bibhatti.
- 74) NG omits nīla-; NG₁₋₂ omit nīlo.
- 75) NG, NS₃₋₄ pramohitāṁ.
- 76) NG, NS₁₋₂ ca.
- 77) NG sūcika.
- 78) NG, NS₁ omit vāta; AS₁ vāṭapaṭam.
- 79) NG, NS₃ omit śyāma-; NS₁₋₂ omit śyāmaḥ.
- 80) NG, NS₁₋₂ ca.
- 81) NG omits saviśvavajratripatākānvita-; NS₁ saviśvavajratripatākāvita.
- 82) NG, NS₃₋₄ khaḍga-; NS₁ kata-; NS₂ kata-.
- 83) NG indraṇī madhu-.
- 84) NG padā 'vaṣṭabhyā.
- 85) NG pītanīlāraktasitacaturmukhaś; NS₁ caturmukham pītanīlāraktasito; NS₃₋₄ pītaḥ caturmukhaḥ pītanīlāraktasitacaturmukho vā.
- 86) NG, NS₁ omit kr̥ṣṇa-.
- 87) NG, NS₁ mukhaś cāṣṭa-; NS₂ mukho cāṣṭa-; AS₁₋₂ mukho vā/ aṣṭa-.
- 88) NG omits eva.
- 89) NG, NS₁₋₂ -catuskōṇa-

- 90) NG, NS₁ *omīt* bāhyasthāne; NS₂ bāhyasthāme.
- 91) NG vajrersyā.
- 92) NG, NS₁ viśvavajra-.
- 93) NG caturthe vajrakūlamāṇḍale; NS₁ caturthe vajrakulamāṇḍale.
- 94) NG aindrādidiṣu airāvatārūḍha; NS₁₋₂ aindrādiṣi bhairavatārūḍha; NS₃₋₄ aindryādiṣi śubhairāvatārūḍha; AS₂ aiśānyāṁ diśi śubhairāvatārūḍha.
- 95) NG yamadaṇḍa-.
- 96) NG, NS₁ vāruṇe; NS₂ vāyuṣyā.
- 97) NG supīto; NS₁ syapīto.
- 98) NG *omīts* kapālī-.
- 99) NG śave; AS₁₋₂ śavāsanaḥ.
- 100) NG -kheṭakabhṛt; NS₁ -karaḥ; NS₂ kheṭakabhṛtkarāḥ.
- 101) NG ākroḍita-; NS₂ sukroḍita-; AS₁ kroḍi-.
- 102) NG -añjalayah nīlotpaladharāḥ; NS₁ -añjalayaḥ nīlotpaladha.
- 103) NG -ādiśāḥ; NS₁₋₂ -ādiśam.
- 104) NG *omīts* kṛṣṇāś; NS₁ kṛṣṇa.
- 105) NG *omīts* -dhanur-.
- 106) NG -jaṭāmukuṭāś.
- 107) NG kukkuṭaṁ; NS₁ ghaṇṭāṁs; AS₁₋₂ kukkutaṁ khaṇṭāṁ.
- 108) NG -añjali.
- 109) NG kṛṣṇa-; NS₂ kṛṣṇo-.
- 110) NG paraśu-.
- 111) NG -śare; NS₁₋₂ -śaro.
- 112) NG, NS₄ -phana-; NS₃ *omīts* -phaṇāḥ-.
- 113) NG *omīts* kṛṣṇāḥ.
- 114) NG -kheṭakādināḥ praharāṇa-.
- 115) NG kṛṣṇarūpāḥ; NS₂, AS₂ kṛṣṇaḥ druma-; NS₃ kṛṣṇaḥ rūpāḥ; NS₄ kṛṣṇaḥ drumaḥ; AS₁ kṛṣṇaḥ/ drumaḥ.
- 116) NG, NS_{1,4} pāṇḍara-
- 117) NG abhijit; NS₁ abhiji.
- 118) NG ca ratna-; AS₁ cala-.
- 119) NG -paridhānāḥ.
- 120) NG vajrāṅkuśi.
- 121) NG, NS₂₋₃ -dhūpā-; NS₁ *omīts* -rūpā-.
- 122) NG *omīts* -āyur-; NS₁ -parvavaśitā; NS₂₋₃ -pūrvavaśitrayeyo; NS₄ -pūrvavaśitāyamo.
- 123) NG om̄ aḥ; NS₂₋₃ am̄ āḥ; AS₁₋₂ a ā.

補 遺

『完成せるヨーガの環』

第19章「金剛界マンダラ」訳・註（十六大菩薩）

凡 例

- ① 和訳に際しては NG [BHATTACHARYYA 1972: 44-47] をサンスクリット・テキストの底本とし, NS₁45a, 3-50b, 2; NS₂64b, 3-69b, 3; NS₃53a, 2-58a, 3; NS₄50b, 1-54b, 1 を参照した。以下にあげたのは、このうち十六大菩薩の部分である。
- ② チベット訳テキストは NT₁138, 3, 3-139, 4, 2; NT₂1216, 1-1220, 6; NT₃thu137a, 6-140a, 1, および NT₄61, 1, 6-62, 2, 3 を参照した。
- ③ AS₁217, 8-223, 7; AS₂132a, 7-135b, 7 を参照した。チベット訳該当箇所 AT₁ 269, 4, 8-270, 5, 5 もあわせて参照した。
- ④ これ以外は、第21章に準じる。

訳

東の蓮弁には¹⁾ 金剛薩埵がいる。身色は白、右手の中指で胸を指しながら金剛杵を持つ。左の金剛の拳は大腿に置き、立派な鈴を持つ。

南には²⁾ 金剛王がいる。身色は黄色、右手にある金剛鉤で鉤召のしぐさをとり、左手には羈索を持つ。両手で握る鉤で鉤召のしぐさをとるという説もある³⁾。

北には⁴⁾ 金剛愛がいる。身色は赤で左右の手で弓矢を持つ。

西には⁵⁾ 金剛喜がいる。身色は緑宝のような色。金剛杵を持った両手で胸の前で賞賛を与えるしぐさをする。

東の蓮弁には金剛宝がいる。身色は黄色、右の金剛の拳⁶⁾で両端に金剛杵のついた宝の華鬘⁷⁾を自分の灌頂の位置⁸⁾で握り、左手には金剛鈴をほこらしげに持つ⁹⁾。

南には金剛光がいる。身色は赤、両手に持った太陽で照らす。

北には金剛幢がいる。身色は緑¹⁰⁾、両手で握る如意宝幢を左肩に置いて示す¹¹⁾。

西には金剛笑がいる。身色は白、右手には歯をつないだ輪がついた金剛杵を握り、左手でも同様に歯をつないだふたつの輪がついたふたつの金剛杵を顔の前に保つ¹²⁾。

東の蓮弁に金剛法¹³⁾がいる。身色は白みをおびた赤、左手で蓮華の茎をほこらしげに握り、右手でその花を開かせる。

南には金剛利がいる。身色は空のような青色¹⁴⁾、左手で般若經の經函を胸の前に持ち、右手で劍をふりあげて保つ¹⁵⁾。

北には金剛因がいる。身色は金色、左手にのせた八幅輪を右手の中指で火炎輪のように回す、という転法輪印を示す¹⁶⁾。

西には金剛語¹⁷⁾がいる。身色は赤、左手で法のほら貝を持ち、右手で獨鈷杵の先端を握る¹⁸⁾。

東の蓮弁には金剛業がいる。身色は緑¹⁹⁾、右手で十二鈷金剛杵を²⁰⁾胸の前で鉤召のしぐさで持ち、左手で二重金剛のついた鈴をほこらしげに持つ²¹⁾。あるいは、両手の先²²⁾を合わせて二重金剛杵を頭上に²³⁾持つ。

南には金剛護がいる。身色は黄色²⁴⁾、両手で金剛の甲冑を握る。

北には金剛牙がいる。身色は黒、両手の小指を金剛の牙の形にして、自分の顔の前に保ち²⁵⁾、悪しきものたちを威嚇する。

西には金剛拳がいる、身色は黄色、金剛で身を固める、金剛の拳で五鈷杵を握り脅かす²⁶⁾。

訳 註

1) AT₁: 'dab ma rnam la mdun du (蓮弁の前には)。

2) AT₁: g'yas su (右には)。

3) GGN 193, 1, 4: 鉤で鉤召のしぐさをとる。

4) AT₁: g'yon du (左には)。

5) AT₁: rgyab du (後ろには)。

6) AT₁: rdo rje dang bcas pa'i khu tshul (金剛杵を持った拳)。

7) GGN193, 1, 5: 灌頂の華鬘。

8) NT₄ は「自分の」の対応語を欠く。具体的には額を指すと考えられる。

9) NT₁: dkul brten pa'o (脇に置く)。GGN は「左手には…持つ」を欠く。

10) GGN193, 1, 6: 絆。

11) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT₁₋₃: g'yon gyi bar du lhur gnas pa'i phyag gnyis kyis yid bzhin gyi nor bu'i rgyal mtshan 'dzin cin 'phyar ba'o (左側に置いた二臂で如意宝幢を握り懸ける); NT₄: g'yon gyi phyogs na gnas pa'i phyag gnyis yid bzhin gyi nor bus mtshan pa'i rgyal mtshan 'phyar ba'o (左の方に置いた二臂 [で] 如意宝のついた幢を懸ける); AT₁: phyag gnyis kyis yid bzhin gyi nor bu'i rgyal ntshan 'dzin zhing g'yon gyi dpung pa'i gnas su 'phyar ba'o (二臂で如意宝幢を握り左の肩に懸ける)。GGN は「左肩において」を欠く。

- 12) 金剛笑の持物は ACR と NPY の間で違いがみられる。AS: savyetarakarābhyañ dantapank-tiyuktavajradvayam gr̥hītvā 'sye niveśayati (左右の手で、歯でつながれたふたつの金剛杵を握り顔に置く)。従って、NPY では左右の手で合計三つの金剛杵を持ち、顔に置くのはそのうちの左手のふたつであったが、ACR の場合、左右の手にひとつずつ金剛杵を顔の前に持ち、その間を歯が並ぶことになる。GGN 193, 1, 7: 二列に並ぶ歯のついたふたつの金剛杵を持つ。
- 13) NT₄: rdo rje rin po che (金剛宝)。
- 14) NT₄: sngon po (青)。GGN 193, 2, 1: サフランの花の色。
- 15) NT₄: ral gyi [gri?] phyar ba'o (剣を振りあげる)。
- 16) Tib. はテキストによって解釈が異なる。NT₁₋₃: mgal me lta bu bskor zhing chos kyi 'khor lo'i phyag rgya 'dzin pa'o (灯明のごとき [輪を] 回し、転法輪印を結ぶ); NT₄: mgal me lta bur bskor zhing chos kyi 'khor lo'i phyag rgya 'dzin pa'o (灯明のごとく [輪を] 回し、転法輪印を結ぶ); AT₁: mgal me'i 'khor lo phyag rgya 'dzin pa'o (灯明の輪の印を結ぶ)。GGN は単に「転法輪印を結ぶ」とする (193, 2, 1-2)。
- 17) NT₁: rdo rje bsrung ba (金剛護)。
- 18) Tib. は NPY と ACR の間で解釈が異なる。NT: rdo rje ltse gcig pa'i ltse [NT₄ は ltse mo] 'dzin pa'o (一鉢杵の先を握る); AT₁: rdo rje ltse gcig pa lta bu'i ltse 'dzin pa'o (一鉢杵のような先端を握る)。GGN 193, 2, 2: 指を立てる。
- 19) NS₁: raktaḥ (赤)。
- 20) NS₁ には「金剛杵を」から「左手で二重」の該当部分が欠落している。
- 21) NT₁: dkur brten ba (脇に置く); NT₄: skur brten pa'o (体に置くのである); AT₁: dkur brten ba ste (脇に置くのであって)。
- 22) Skt. の kapota が手のどの部分を指す語であるのか明らかではないが、NT₁₋₃, AT₁: thal mo spyi bor より「手の先」と解釈する。NT₄ は kapota に対応する語を欠く。
- 23) AT₁ は「頭上で」に対応する語を欠く。GGN 193, 2, 3: 両手に三鉢金剛杵を持ち、如来たちへの供養のために舞う; GDK 459, 5-6: 両手にふたつの三鉢金剛杵を持ち、如来たちへの供養のために舞う。
- 24) NT₄: ser mo (黄色 [語尾が女性形 mo である])。
- 25) AT₁: zhal gyi grwar (顔の端に)。
- 26) Tib. の金剛拳の記述はテキストによって解釈が異なる。NT₁₋₃ はほぼ Skt. に一致する。NT₄ は「身色は黄色…身を固める」の対応箇所を欠く。後半部分は NT₁₋₃ にほぼ一致する。AT₁: rgyab tu rdo rje khu tshur gyi tshams su rdo rje ste rdo rje khu tshur dag gis 'tsher ba'i rdo rje lnga gzun pa'o (後ろにいる金剛拳は [体の] はしまで金剛で覆われ、両方の金剛の拳によって恐ろしい五鉢杵を握るのである)。GGN 193, 2, 5: 身色は白、金剛杵をもつ。

参考文献

- BANERJEA, Jitendra Nath
1974(1956) *The Development of Hindu Iconography*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd..
- BHATTACHARYYA, Benoytosh
1968a(1958) *An Introduction to Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.
1968b(1925) *Sādhanamālā* (2 vols.). G.O.S. Nos. 26, 41. Baroda: Oriental Institute.
1972(1949) *Niśpannayogāvalī of Mahapāṇḍita Abhayākaraṇgupta*. G.O.S. No. 109. Baroda: Oriental Institute.
- BHATTACHARYYA, Dipak Chandra
1978 *Studies in Buddhist Iconography*. New Delhi: Manohar.
1974 *Tantric Buddhist Iconographic Sources*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd..
- BSOD NAMS RGYA MTSHO
1983 *The Tibetan Mandalas, the Ngor Collection*. Tokyo: Kodansha.
- CLARK, Walter Eugene
1965(1937) *Two Lamaistic Pantheons*. New York: Paragon Book Reprint Corp..
- DAS, Sarat Chandra
1986(1902) *A Tibetan-English Dictionary*. Kyoto: Rinsen Book Co. Ltd.
- DOWSON, John
1973 *A Classical Dictionary of Hindu Mythology*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd..
- GETTY, Alice
1962(1928) *The Gods of Northern Buddhism*. Tokyo: Charless E. Tuttle Company.
- GORDON, A. K.
1978(1914) *The Iconography of Tibetan Lamaism*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd..
- 羽田野伯猷
1958 「Tantric Buddhismにおける人間存在」『東北大学文学部研究紀要』9: 1-79.
- 逸見梅栄
1935 『印度に於ける礼拝像の形式研究』東洋文庫。
- HUNTINGTON, Susan L.
1984 "Pāla-Sena" Schools of Sculpture. Studies in South Asian Culture Vol. 10. Leiden: E. J. Brill.
- JÄSCHKE, H. A.
1980(1881) *A Tibetan-English Dictionary*. Delhi: Motilal Banarsi Dass.
- 'JAM DBYANG BLO GTER DBANG PO
1971 *rGyud sde kun btus*. Vol. 16. Delhi: N. Lungtok & N. Gyaltzan.
- 上村勝彦
1985 「ラサとバーヴアの因果関係について」『仏教思想の諸問題』春秋社 pp. 571-585.
- 加藤 敬・松長有慶
1981 『マンダラ』毎日新聞社。
- 加藤 敬・小林暢善
1985 『マンダラ蓮華』平河出版社。
- LIEBERT, Göesta
1976 *Iconographic Dictionary of the Indian Religions*. Studies in South Asian Culture Vol. 5 Leiden: E. J. Brill.

法界語自在マンダラの神々

- LOKESH CHANDRA
1986 *Buddhist Iconography of Tibet*. Kyoto: Rinsen Book Co. Ltd..
LOKESH CHANDRA (reproduced)
1969 *The Collected Works of Bu-ston, part 14 (pha)*. Śāta-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 54. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
1977a *Kriyāsamuccaya*. Śāta-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 237. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
1977b *Vajrāvalī*. Śāta-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 239. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- MALLMANN, Marie-Thérèse de
1964 *Étude iconographique sur Mañjuśrī*. Publication de l'École Française d'Extrême-Orient Vol. 55. Paris: École Française d'Extrême-Orient.
1975 *Introduction à l'iconographie du tantrisme buddhique*. Bibliothèque du Centre de Recherches sur l'Asie Centrale et la Haute Asie Vol. 1. Paris.
- MATSUNAMI, Seiren
1965 *The Catalogue of the Sanskrit Manuscripts of the Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.
- MITRA, Debara
1965 A Study of Some Graha-images of Indian and thier Possible Bearing on the *Navadevās* of Cambodia. *Journal of the Asiatic Society* 7(1-2): 13-38.
- 満久崇磨
1977 『仏典の植物』八坂書房。
- MUKHERJI, Durga Das
1963 *Āryamañjuśrī-nāmasaṅgīti*. Calcutta: University of Calcutta.
- NGAG DBANG BLO BZANG CHOS LDAN (チャンキヤ)
1957a *Rdzog 'phreng dang rdor 'phreng gnyis kyi cho ga phyags len gyi rim pa lag tu blangs bde bar dgod pa*. TTP Vols. 162-163, No. 6236, 181, 1, 1-22, 4, 3.
1957b *Phreng ba dang kri ya sgrab pa'i dkyil 'khor zhe lnga'i dbang bskur tshul gyi cho ga*. TTP Vol. 163, No. 6237, 22, 4, 3-56, 4, 1.
- PAL, Prapaditya and BHATTACHATYYA, Dipak Chandra
1969 *The Astral Divinity of Nepal*. Varanasi: Prithivi Prakashan.
- PAN CHEN BLO BZANG CHOS KYI RGYAL MTSCHAN (パンチェン一世)
1973 *Rdo rje phreng ba'i dkyil 'khor chen po bzhi bcu rtsa gnyis kyi sgrub thab, Rin chen dbang gi rgyal po'i phreng ba*. Pan chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan gsung 'bum Vol. 2. New Delhi (hand-written copy from prints of the Tashilhumpo blocks).
- RAGHU VIRA and LOKESH CHANDRA
1967a *A New Tibeto-Mongol Pantheon*. Śāta-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 21 (12) New Delhi: International Academy of Indian Culture.
1967b *A New Tibeto-Mongol Pantheon*. Śāta-piṭaka Series, Indo-Asian Literatures Vol. 21 (13) New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- SARASWATI, S. K.
1977 *Tantrayāna Art and Album*. Calcutta: Asiatic Society.
- 清水 乞
1983 「マンダラと美的情趣」『マンダラの世界』(松長有慶編) 講談社 pp. 100-132.
1984 「九曜とその図像」『大乗仏教から密教へ』春秋社 pp. 473-489.
- 立川武蔵
1984 Materials for Iconographic Studies of the Eight Mother-goddesses in the Kathmandu Valley, Part I. *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal, Monumenta Serindica* 12: 1-29.
1986a Materials for Iconographic Studies of the Eight Mother-goddesses in the Kathmandu Valley, Part I-(2). *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*,

- Monumenta Serindica* 15: 41–58.
- 1986b 「金剛ターラーの觀想法」『仏教美術史』吉川弘文館, pp. 65–97.
- 1986c 「カトマンドゥにおける八母神と八バイラヴァ」『密教圖像』4: 29–45.
- 1987a 『曼荼羅の神々』ありな書房。
- 1987b 「仏教圖像」『チベットの言語と文化』(長野泰彦・立川武藏編) 冬樹社 pp. 336–363.
- 1987c 「金剛界マンダラ資料」『ニヤグローダ』仏教思想研究会 4: 1–63.
- 田中公明
- 1985 「慈寧宮宝相樓のブロンズ像立体曼荼羅セットの解析」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』7: 43–63.
- 1987 『曼荼羅イコノロジー』平河出版社。
- VAN KOOIJ, Karel Rigit
- 1977 The Iconography of the Buddhist Wood-carving in a Newar Monastery in Kathmandu (Cuṣya-Bahal). *Journal of the Nepal Research Center* 1: 39–82.
- WAYMAN, Alex
- 1985 *Chanting the Names of Mañjuśrī*. Boston and London: Shambala.
- 頬富本宏
- 1985 『マンダラの仏たち』東京美術。